

みずほディーラーズアイ (2024年3月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 146.00 ~ 153.00

金融市場部 為替営業第二チーム 伊藤 拓義

■ 先月の為替相場

月初、日銀政策決定会合のややタカ派な内容、続くFOMCでのパウエルFRB議長会見を受けて146円台でオープン。1日、米労働統計の弱い結果や、米地銀株下落を受けた米金利低下を背景に一時145.90円まで下落するものの、2日の米1月雇用統計が非常に強い結果となったことをうけて148円台半ばまで急伸。5日、米1月ISM非製造業景気指数の強い結果を背景にドル/円は続伸。6日、一転低下に転じる米金利を横目に148円を割り込む展開。7日、米地銀株下落に伴うリスク回避の動きを受け、一時週安値の147.62まで急落。8日、内田日銀副総裁のハト派的な発言により、日銀による金融緩和の長期化観測の高まりから円売りが加速、149円を目指し上昇した。海外時間も堅調な米労働統計を受け米金利が上昇したことも下支えとなり、149.48円まで続伸した。12日、149.21円でオープンしたドル/円は、本邦休日の中でじり安。米金利低下を受け続落してスタートも、FED高官のタカ派な発言を受けた米金利上昇を背景に底堅い動きが続いた。13日、日本株上昇を横目に、149円台半ばでじり高。海外時間は米1月CPIの強い結果を受け、昨年11月17日以来となる150円台に乗せ、その後、週高値となる150.88円まで上昇。14日、神田財務官による円安牽制発言などを受け、150円台半ばでじり安。15日、米1月小売売上高の弱い結果に149.51円まで急落する場面もあったが、米金利が上昇に転じたことを受け、150円台前半に値を戻した。16日、米1月PPI上振れに米インフレの根強さが意識され、ドル/円は一時150.65円まで上昇。ただ、その後FED高官からのハト派発言に上値重い流れに転じた。21日、公表されたFOMC議事要旨は、早期利下げへの慎重姿勢を崩さないややタカ派の内容だったが、相場への影響は限定的。22日、好調な米指標を受けて米債利回りは上昇、ドル/円は150円半ばを突破した。23日、米半導体大手株の急伸も一服しNASDAQは小幅安、ドル/円は欧米金利低下に150.30円へと小幅下押しした。26日、日経高などを背景に円独歩安の展開で一時150.83まで上昇も上値追い切れず。27日、本邦CPIが予想を上回ると円買戻しの動きが強まるが、下値は限定的。海外時間にはFED高官から利下げは時期尚早との発言もあり150円台半ばまで戻した。29日、東京時間、高田日銀審議委員の発言を受けて円買い優勢に。ドル/円ロングポジションのアンワインドもあったか、21日以来の150円割れ。その後は米1月PCEの発表待ちで膠着。

■ 今月の見通し

今月のドル/円相場は底堅い流れが継続か。

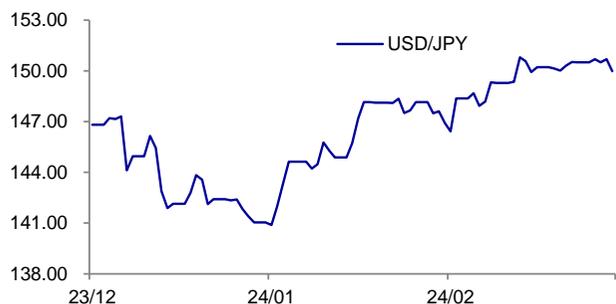
好調な米指標を背景に米国の利下げ開始織込みは6月まで後退した。FED高官からも相次いで早すぎる利下げに釘が刺されている状況。一部インフレ指標で減速がみられているが、まだ利下げを展望する時期ではないとの見方が優勢でドル/円は底堅い動きが続いている。パウエル議長が指摘した最後の1マイルがとて長く感じる状況になっており、6日の議長議会証言に注目が集まる。タカ目線の発言に加え、その後の米雇用統計やインフレ指標が強めであれば、3月FOMCではDOTS引き上げの可能性もあるだろう。足元年内75bpの利下げが織込まれている状況で、ドル買い余地は限られるという見方もあるが、DOTS引き上げにより利下げ時期がさらなる後退するリスクは頭に入れておきたい。

一方で日本サイドはハト派材料に事欠かない状況。先月は内田日銀副総裁の発言により金融緩和の長期化観測が高まった。3月もしくは4月にはマイナス金利の解除が見込まれているものの、その後連続的な利上げに踏み切ることが出来ないのは明らかで、緩和政策継続が既定路線。既に織り込まれているマイナス金利解除だけで円が買い戻されるかは疑問。さらに実需フローはドル/円買い超。新NISA経由で個人の外貨買いも相応にあると指摘される中、ドル/円が大きく下落する可能性は低いと考える。

ドル/円上昇時には為替介入への警戒は煽る。当然、当局は水準を示すことはしないものの、介入目線は152円程度とみられており、その水準は意識される。ただ、年初から急激に円安が進行したものの2月はスピード調整がなされており、ドル買い主導でのドル/円上昇時には介入しづらい環境でもあるかもしれない。介入があれば、通貨先物ポジションをみても相応に円売りポジションが積まれていることから4-5円の調整は期待できそう。ただ、145円にかけては買い需要は旺盛とみられ、結局ドル/円の下値は限定的である可能性が高い。商業用不動産や地政学リスクの高まりからリスクオフが強まったとしても、円買いよりもドル買いが優勢になることが予想される。

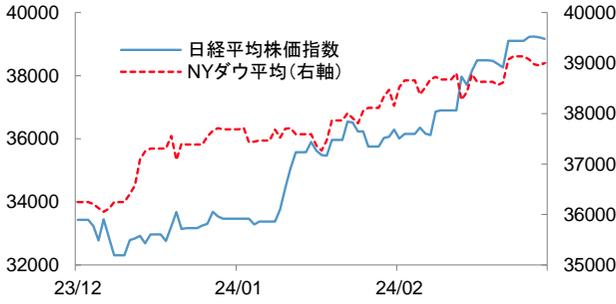
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	米単位人件費	1Q	1.2%	0.5%	-1.2%
2/2	米非農業部門雇用者数変化	1月	185K	353K	216K
2/2	米失業率	1月	3.8%	3.7%	3.7%
2/2	平均時給 (前月比)	1月	0.3%	0.6%	0.4%
2/13	米CPI	1月	2.9%	3.1%	3.4%
2/13	米CPI(除く食品エネルギー)	1月	3.7%	3.9%	3.9%
2/15	米PPI	1月	0.6%	0.9%	1.0%
2/15	米PPI(除く食品エネルギー)	1月	1.6%	2.0%	1.8%
2/29	米PCEコアデフレータ (MoM)	1月	0.4%	0.4%	0.2%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	10名	152.25 ～ 147.00	ベア	6名	152.00 ～ 145.00
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ベア	152.00 ～ 145.00	日銀の金融政策変更に対する思惑やそれに伴う日経平均株価の調整がドル円の上値を抑えよう。また、一部の国ではハト派色を強めておりクロス円を中心に積みあがった円ショートの見直し、ドル円の調整を喚起する展開にも留意したい。	松永	ブル	152.50 ～ 147.50	米国の強い物価指標の結果受け、市場の利下げ織込は年内3回に後退するが、3月FOMCのドットチャートでFRBと市場の利下げ見通しのギャップに注目。FRBの見通しがよりスローペースならば、ドル円は上値を試す動きとなろう。
河合	ブル	152.00 ～ 148.00	根強い米インフレ懸念と日銀の金融緩和長期化観測から、上昇を続けたドル円は、2月後半から膠着感を強めている。3月、欧→日→米の順に中銀イベントを迎えるが、相場トレンドを形成する結果とはならず、方向感のないレンジ相場を予想。	田川	ブル	152.00 ～ 146.50	3月または4月の日銀マイナス金利解除はほぼ織り込まれている状況、後はその後の利上げについてのヒント待ち。Fedについても利下げ織り込みが進み高官発言にも反応薄くなってきている。150円を中心とした方向感のない展開を想定。
川端	ベア	152.00 ～ 145.00	早期利下げに慎重なFRB高官発言による利下げ織り込み剥落と金利差背景の円キャリーはドル円買い材料だが、介入警戒感もあり直近高値更新には値幅以上に距離がある。3月以降の日銀政策変更もスコープ入り、円買戻しが入り易い。	上遠野	ベア	151.50 ～ 145.00	利下げタイミングの見極めに逡巡するFRBに対し、3-4月会合でのマイナス金利解除が既定路線となりつつある日銀との対比感から、一時的にせよ円高方向への動きは避けられずか。目下膨らんだ円売りポジション状況もあり勢いは出易い。
加藤	ベア	152.00 ～ 145.00	「もしトラ」リスクが「ほぼトラ」リスクになってきており、本邦において為替介入の可能性は前回より低いと思うが、ドル/円相場は買われすぎの領域に入っておりこれ以上上値を伸ばすのは難しいと考える。	鈴木	ブル	153.00 ～ 145.00	仮に3月会合でマイナス金利解除がなされても、その後の断続的な利上げは想定されず、影響は一時的か。米国の利下げ織り込みも後退する中、日米金利差の大きさが再度見直され、円売り地合いが続くと予想する。
山崎	ベア	152.00 ～ 145.00	日銀の金融緩和解除への思惑が高まることで、いったんは下方向を予想する(円高方向)。3月のBOJは一つのポイントかと思うが、3月見送り、4月への地ならしと予想。それでも下方向への圧力が強いと考える。	大熊	ブル	152.00 ～ 147.00	日銀が金融緩和と出口への地均しを始めているものの、実際動き出すのは4月以降と思われる。日米の金利差は変わらず、米インフレは未だ根強いことから、ドルは引き続き底堅さを維持すると予想する。
伊藤	ブル	153.00 ～ 146.00	強い米指標を背景に3月FOMCでDOTSが引きあがる可能性。初回利下げ織込みは6月まで後退しているが、更なるプッシュバックがあればドル買いが強まるだろう。仮に為替介入が実施されても、ドル円は下値で拾われるだろう。	西	ブル	153.00 ～ 147.00	根強い米個人消費を背景にインフレ鈍化は停滞しており、Fed高官もタカ派スタンスを強めている。市場の早期利下げ織込みは剥落しきっており上昇余地は限定的。ただ、日銀発信の円買い材料も出尽くしており、じり高推移が継続か。
尾身	ブル	153.00 ～ 147.00	今月も米国の高い政策金利の維持と、日銀の金融緩和と政策維持によりドル/円はドル高円安傾向が維持されると予想。但し、米利下げ開始時期を巡る思惑が交錯しており上値は限定的か。	伊藤(基)	ブル	151.00 ～ 147.00	3月下旬開催の日銀金融政策決定会合に向けて、マイナス金利解除に向けた発信が徐々に出てくるだろう。ここ最近では材料が乏しかっただけに、こうした発言に過敏に反応しやすい相場となりドル円は下落しやすいだろう。
山口	ブル	152.00 ～ 147.00	本国は景気関連の指標やインフレ指標が予想外に上振れる結果が続いており、早期利下げ観測は後退している。FRB高官からは年内の利下げ開始は示唆されつつも、開始時期が後ずれするとドル買い圧力は高まる。	范	ベア	152.00 ～ 147.00	日本では春闘の結果が出揃い、日銀政策変更への環境が整う中、ドル円は上値が重くなっていく展開を予想。足元の株高や積みあがったクロス円のキャリートレードの調整からくる円高にも留意。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0650 ~ 1.0950
EUR/JPY 159.00 ~ 164.50

金融市場部 為替営業第二チーム 松永 裕司

■ 先月の為替相場

1週目は、米雇用関連指標の結果を受け大幅下落。1日、底堅い米金利の動きに週安値となる1.0780に下落も、ユーロ圏1月消費者物価指数(HICP、速報)の上振れを受け、1.08台後半に反転上昇。2日、米1月雇用統計の強い結果を受けて急落し、1.0781まで下落。米金利が高止まりする展開に上値重く、1.0791で越週した。

2週目は、週を通じて上昇。週初5日、1.0780でオープン。米国時間のFRB高官のタカ派発言や、米1月ISM非製造景気指数の強い結果に1.0730を割り込んだ。6日、独12月製造業受注が事前予想を上回ると、1.0760を上抜け。ただ、上値は重く、ユーロ/円やユーロ/ポンドの売りに押され、週間安値となる1.0722まで下落。7日、8日は材料難の中、小幅反発。9日は独1月消費者物価指数(CPI、確報)もサポートに一時1.0796の週間高値をつけるも一段高とはならず1.0784で越週。

3週目は、下に往って来いの展開。週初12日、ユーロ/ドルは1.0788でスタート。東京休場の中、終日小動き。13日、独2月ZEW景気期待指数が予想を上回り一時ユーロ買優勢となったが、その後、米1月CPIの強い結果を受け1.0701まで下落。14日、米金利が低下を材料に底堅く推移し1.0734まで反発。15日、ラガルドECB総裁のタカ派な発言に反応し買い優勢となるも、その後米1月小売売上高の弱い結果うけ一時1.0784まで続伸。16日、米1月PPIが予想対比大きく上振れたことで一時1.0733まで下落も、米国連休前にユーロを買い戻す動きも出て1.0776で越週。

4週目は、米金利低下が下支えとなり、週半ばに上昇した。週初19日、1.0786でオープン。米国休場で材料乏しく、1.07代半ばで小動き。20日、米金利低下が支援材料となり、1.08台前半まで上昇。21日、1.08台前半でもみ合い推移。22日、米企業の好決算を受け株価上昇する中、週高値となる1.0889まで上昇。しかしその後ユーロ圏2月製造業PMIの軟調な結果や米雇用指標の良好な結果に下落。23日、1.08台前半でもみ合いが継続しオープンとはほぼ同水準となる1.0822で越週。

5週目は、横ばい圏での動き。週初26日、独金利が上昇する展開に1.08代半ばまで上昇。27日、月末に絡んだユーロ買いが見られたものの材料難で方向感なく推移。28日、欧州時間入り直後に1.08を割り込む場面も見られたがその後持ち直した。

■ 今月の見通し

米国の利下げ時期の後ろ倒しを市場が織り込む一方、リスクセンチメントの改善もサポートに2月のユーロは月を通じて持ち直す動きが続いた。3月は7日ECB政策理事会、20日FOMCと双方とも金融政策決定会合を控える。

直近のラガルドECB総裁の発言を見ると、欧州のインフレ鈍化が順調に進んでいることは認めつつも、賃金の上昇圧力は依然として強く、今後インフレが低下していくには賃金の動向がより重要との認識を示し、早期利下げへの期待をけん制している。

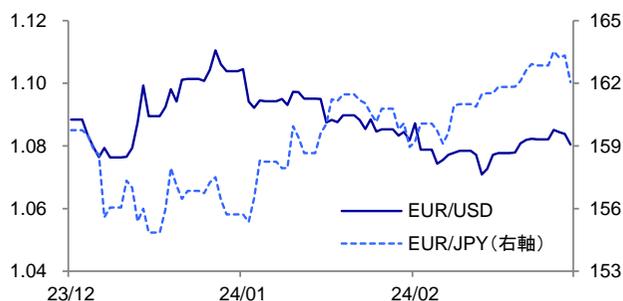
今後の金融政策については4月以降の賃金統計を見ながら判断していくと思われ、3月会合時点で今後の金融政策の方向性について具体的なスケジュールを示す可能性は高くないと予想される。相場への影響も限られよう。

一方、米国についても足元の強い労働、物価関連指標の結果を受け、3月FOMCでの利下げ織込はほぼ消滅し注目度も低下している。ドットチャートで年内の利下げ見込みがどの様に修正されるかには注目したいが、FRBも利下げ時期については、今後の経済指標の結果を見ながら判断していくと思われ、ECB同様、為替のトレンドを形成するような材料になりづらいとみる。

市場の注目が、欧米どちらが先に利下げに動くのかという点が今後の焦点となるのであれば、結局は双方の経済環境の状況を見守る他なく、より経済指標の結果への相場の反応も大きくなる。ただし、FRB、ECBともに6月以降の利下げを市場が織り込む中、3月の経済指標の結果のみで利下げ時期を判断するのは難しい。方向感を見出しづらい地合いが継続しよう。

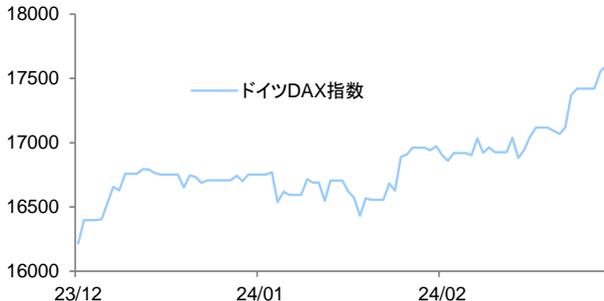
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	ユーロ圏製造業PMI	1月	46.6	46.6	44.4
2/1	ユーロ圏消費者物価指数	1月	2.7%	2.8%	2.9%
2/6	独製造業受注	12月	-0.2%	8.9%	0.3%
2/6	ユーロ圏小売売上高	12月	-0.8%	-0.8%	-1.1%
2/13	独ZEW景気期待指数	2月	17.3	19.9	15.2
2/28	ユーロ圏消費者信頼感	2月	-	-15.5	-15.5

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	5名	1.1000 ～ 1.0740	ベア	11名	1.1000 ～ 1.0650
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ベア	1.0900 ～ 1.0650	米国の底堅い景況感とFRBの利下げ後ずれに加え、対照的に力強さに欠ける欧州の景気動向を背景にユーロの上値は重くなることを予想。また、IMM通貨先物ポジションもドルロングに傾斜しつつあり、ユーロは売られやすい地合いか。
河合	ブル	1.1100 ～ 1.0750	3月、欧→米の順に迎えるECB政策理事会・FOMC共に政策金利据え置きとなり相場トレンドを形成する結果にならない可能性が高い一方、需給面(ユーロ圏の経常収支)に支えられ、ユーロドルは堅調な展開を予想。
川端	ベア	1.1000 ～ 1.0700	24年後半に利下げが織り込まれるが、インフレ鎮静化の確認については慎重なECB高官のスタンスが顕著であり、EUR自体は堅調な地合い。他方、域内経済は引き続き脆弱であり、レンジ推移が継続。
加藤	ブル	1.1000 ～ 1.0750	「もしトラ」リスクが浮上するにつれて米国の先行きに暗雲が立ち込める。したがってユーロ圏内の要因というよりも米国との相対的要因によってユーロドル相場が再来すると想定する。
山崎	ブル	1.1000 ～ 1.0650	上方向を予想。ユーロ圏の経済は想定よりも良好であるように思われ、2月も上昇した。3月もこの流れが継続し、緩やかに上方向を予想したい。しかし、そのまま上昇が続くと予想はしておらず、上値は限定的。
伊藤	ベア	1.1000 ～ 1.0600	米利下げ織り込みの動向に振られる展開か。足元の米経済の強さにドルは強含みやすくユーロは上値重い。利下げは時期尚早としながらも、賃金圧力の緩和、基調インフレの減速を背景にECBの利下げが米国より早期実現する可能性あり。
尾身	ベア	1.1000 ～ 1.0600	ECBの利下げ開始時期への思惑を巡りもみ合いが継続しそう。かかる状況下、ECB高官のハト派な発言が目立っており、やや上値重い展開が優勢となるのではないかと。
山口	ベア	1.1050 ～ 1.0700	欧州はリセッション入りを回避できそうな状況となっているが、欧米のどちらかが先に利下げに踏み切ると相場の方向感が変わる。米利下げ観測が再び高まるとドル売りが継続し、ユーロは一時的に買われる展開となると予想。

松永	ベア	1.0950 ～ 1.0650	欧米どちらが先に利下げに動くのが今後の焦点となろうが、FRB、ECBともに6月以降の利下げを市場が織り込む中、3月の経済指標の結果のみで利下げ時期を判断するのは難しい。方向感を見出しづらい地合いが継続しよう。
田川	ブル	1.0950 ～ 1.0740	足元のテーマは「ユーロ域内経済は想定していたほどは悪くなさそうだ」、といったところか。ECBとFedの両者が年後半にかけて利下げするというシナリオが崩れなければ底堅い展開を想定。
上遠野	ベア	1.1000 ～ 1.0650	米国のインフレが想定外の粘着性を示す中、EU域内のインフレは着実な鈍化を見せており、ECBが先行して利下げを開始するシナリオを織り込みに行く動きが優勢になるとみる。
鈴木	ブル	1.1100 ～ 1.0700	域内の景気停滞懸念は依然として燻るものの、現状の織り込み具合では、米国対比利下げの開始は遅くなりそう。経常収支も高水準を維持しており、金利、実需の面からユーロは底堅い推移になることを予想する。
大熊	ベア	1.1050 ～ 1.0750	FRBと同じく、ECBも早期利下げ観測をけん制する向きがあり、足元、ユーロ圏経済への不透明感は和らいでいる。ユーロは底堅いながらも、米経済が予想以上に堅調なことが重しとなり、上値重い推移を予想。
西	ベア	1.1000 ～ 1.0600	米利下げ開始が後ずれしている一方で、ユーロ圏経済は低調かつインフレ減速が見込まれており、Fedよりは利下げしやすい状況。米国に先駆けて利下げが実現すれば、ユーロ相場は弱含みやすいか。
伊藤(基)	ベア	1.0900 ～ 1.0700	引き続きマクロ経済環境の違いが意識される展開になろう。米国の景気が堅調に推移しており、早期利下げの必要性は低下。一方で、欧州の景気は弱含んでいるだけに、景気が強いドルが買われれば、ユーロが売られる展開になるとみている。
范	ベア	1.0950 ～ 1.0650	底堅い米国経済と比較し相対的に弱い欧州経済は売られやすい地合いが継続か。利下げ時期も米国より早い段階で到来するものと予想。

英ポンド相場

予想レンジ: **GBP/USD 1.2400 ~ 1.2800**
GBP/JPY 187.00 ~ 193.00

欧州資金部 中島 將行

■ 先月の為替相場

2月の英ポンド相場は対ドルで上下に振れ幅の大きい動きながら、1か月を通して見ればほぼ横ばいの水準で引けようとしている。

第1週の英ポンド相場は、対ドルで小幅に下落。後述するように、1日のBOEの金融政策発表がややタカ派だったことを受けて当日は対ドルで上昇したものの、翌2日の米1月雇用統計が極めて強い結果だったことを受けて前日までの上昇分を全て失った。

第2週のポンドは週初の5日は対ドルで下落で始まったものの、6日以降は持ち直した。その前の週の2日に発表された米雇用統計の強さや、週末のパウエルFRB議長のテレビインタビューでのタカ派姿勢が重しとなった一方、英国の住宅ローン金利の低下を受けて英住宅価格が予想以上に持ち直したことがサポート材料となった。BOEの政策委員会のメンバーでは、マン、ハスケル、ビル、ブリーデン各氏の発言が伝わったが、タカ派、中立の各自の立ち位置を改めて確認するものに留まった。

第3週の英ポンドは対ドルで下落。13日公表の米1月消費者物価指数(CPI)が強い結果だったことを受けグローバルにドル高となったほか、14日に公表された英1月CPIや、15日公表の英2023年10～12月期GDPが市場予想を下回ったこともありポンドは下げ幅を拡大した。14日時点では週初から最大で約▲0.8%下落した。その後、グローバルにドル高の勢いが和らいだことや、16日公表の英1月小売売上高が英経済のリセッション脱却を示唆する内容だったこともあり、週終盤に英ポンドは下落幅を縮小し、1.26付近で取引を終えた。

第4週のポンド相場は対ドルで小幅に反発。BOEの高官発言が注目された。ベリヤー総裁は20日の英下院の公聴会において、利下げの前にインフレ率が目標に達する必要があるのは明らかであると発言したほか、市場の利下げ織り込みについても理不尽ではないと指摘している。一方、2月会合でそれまでの利上げ主張を取り下げたグリーン委員は23日、「利下げを支持するには、高インフレ率の定着が避けられることを確認する一段の証拠が必要」と述べている。

ポンドは対円では主に円の弱さに起因する形で大幅に上昇。2015年8月以来となる190円台が定着しつつある。2023年10～12月期の日本の実質GDP成長率の弱さを背景に日銀の金融政策正常化が緩やかなペースになるという見方が強まった。

■ 今月の見通し

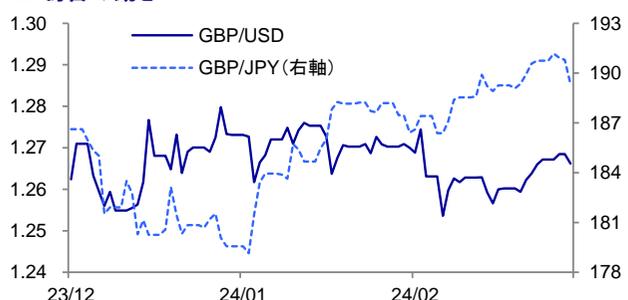
BOEが欧米の主要中銀の中でも、高金利政策を長期間維持する可能性が高いことがポンドのサポート要因となっており、3月も堅調な展開が続くだろう。改めてBOEの2月金融政策決定会合を振り返ると、市場予想通り5.25%の政策金利が据え置かれた一方、注目されていた利上げ票は2名となった。前回12月会合後の3名の利上げ票と比較してグリーン委員が利上げ票を取り下げたのみだった。「超タカ派」のマン委員が利上げ票を投じる可能性は意識されていたものの、ハスケル委員まで利上げ票を投じたことはやや意外だった。ハスケル氏は12月20日公表の英11月CPIが大幅なインフレ減速を示したこともあり、ハト派スタンスへの転換を示唆していたためだ。利下げ票は「超ハト派」のデングラ委員のみで、残り6名は据え置きに票を投じており、票の分布はタカ派的だった。また、BOEのインフレ率の予測を見ると、マーケットの織り込みに沿って政策金利が推移するシナリオでは、2024年7～9月期にもCPIは前年比+2.2%とBOEのターゲットの前年比+2.0%を上回る見通しが示されている。会合前1月末時点で短期金利市場では5月会合での▲25bpの利下げが76%程度、6月会合ではフルに織り込まれていたが、BOEはこうした見方を暗に否定した格好だ。もっとも、BOEの発表はタカ派一辺倒というわけではない。ハト派的だった要素として、まずは声明文において、「追加利上げが必要となる可能性がある」との一節をガイダンスから削除し、利下げに道を開いたことが挙げられる。また、インフレ見通しでも、政策金利を現在の5.25%で一定としたシナリオでは2025年以降、インフレ率は下落トレンドを辿り、2025年10～12月以降には前年比+2.0%のターゲットを大きく下回る見通しが示されている。こうした見通しからはBOEが年内利下げを意識しつつあり問題はそのタイミングのみという印象を受ける。もっとも、グリーン委員が23日の講演で指摘したように、英国の賃金の伸びは「正しい方向に向かってはいるものの、依然として米国やユーロ圏に比べて「かなり高い」方向が利下げ開始に向けた障壁となる。ユーロ圏では2月20日に2023年10～12月期の妥結賃金が発表されており、前年比+4.46%と7～9月期の同+4.69%から減速した。英国の賃金統計として注目される週平均賃金(ボーナスを含む)は2023年10～12月の3か月平均で前年比+5.8%と2023年5～7月の同+8.5%のピークからは低下しているものの、それでも高水準にある。3月の英、米、欧、日の金融政策決定会合は相場を大きく動かす材料とはなりにくい。英国国内の要因では3月6日公表の予算案が注目される。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で人気の旅行先』
 イギリスで一番人気の旅行先は、何と言っても首都ロンドンです。大英帝国の栄華を残す歴史的な建造物と、近代的な高層ビルが共生するロンドンの街並みは、人々をひきつけてやまないものがあります。みずほ銀行のロンドンオフィスはロンドンの代表的な観光名所の一つでもあるセント・ポール大聖堂の近くにあり、いつも多くの観光客でにぎわっています。
 ロンドンに次いで人気の観光地は、北部スコットランドの首都エディンバラです。こちらは歴史的な街並みの美しい「古都」という趣きであり、丘の上にあるエディンバラ城から見る眺めは格別です。少し離れていますが、北部には、ネッシー伝説で知られるネス湖があります。イギリス人に人気の観光地としては、ピーター・ラビットで知られる「湖水地方」があります。イギリス人の理想は余生を田園で過ごすことですが、まさにその理想を体現している土地ではないかと思います。私も訪問時は、ゆったりとした時間を過ごすことができました。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	イングランド銀行政策金利		5.25%	5.25%	5.25%
2/8	RICS住宅価格指数	1月	-22%	-18%	-29%
2/13	失業率	12月	4.0%	3.8%	3.9%
2/13	週平均賃金(前年比)	10-12月	5.6%	5.8%	6.7%
2/14	CPI(前年比)	1月	4.1%	4.0%	4.0%
2/15	鉱工業生産(前年比)	12月	-0.4%	0.6%	0.1%
2/15	製造業生産(前年比)	12月	0.6%	2.3%	1.9%
2/15	GDP(前期比)	Q4	-0.1%	-0.3%	-0.1%
2/16	小売売上高(前月比)	1月	1.5%	3.4%	-3.3%
2/22	サービス業PMI	2月	54.1	54.3	54.3

豪ドル相場

予想レンジ: **AUD/USD 0.6350 ~ 0.6650**
AUD/JPY 95.40 ~ 99.50

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

1日は前日の豪10-12月CPIの結果や米地銀の決算を受けたリスクオフ地合いから軟調な推移が継続。0.6508まで下落するも、軟調な米経済指標を受けたドル売りを背景に0.65台後半まで戻して引けた。2日、強い米1月雇用統計が示されるとドル買いから0.6504まで下落。5日、米金利が上昇すると、豪ドルは一段と下げ0.6469まで下落した。6日、RBA理事会は4.35%で政策金利据え置きを決定。声明文で「インフレは尚高く、追加利上げの可能性は排除出来ない」とあり、0.6525まで上昇後、反落。8日、抵抗線となっている100日移動平均線の0.6538をトライする展開が続いた。但し中国1月CPIが15年ぶりの大幅下落となり、中国のデフレ圧力が意識され始めると豪ドルの重しとなり、抵抗線を上抜け出来ずに反落。米新規失業保険申請件数が減少し、労働市場が依然堅調であると示されると、更にドル買いとなり0.64台後半まで下落した。9日、米CPI年次改定が下方修正され、ドル売りを背景に0.65台前半へ戻した。13日、米1月CPIは予想を上振れ、米利下げ織り込みが後退するとドルが急伸し豪ドルは大きく下げて昨年11月以来の安値0.6443まで下落。14日は輸出勢の買いフローや米金利低下を背景に豪ドルは上昇し0.6490近辺で引けた。15日、豪1月雇用統計で就業者数が500人に留まり、失業率は2年ぶりの4%台のせ。豪ドルは0.6478まで下落したが、すぐに反転上昇した。米1月小売売上高が大幅に落ち込むと更に上値を迫る展開となった。20日、RBA議事要旨では追加利上げも検討した事が明らかになり、未だ利上げの可能性が残されているとの見方が広がったことで豪ドルは支えられたが、一方で「利上げは景気悪化の場合の利下げシフトを阻止しない」とも記されており、利上げをしても利下げへ即舵をきる事が可能であると示唆された事で上昇幅は小幅に留まった。22日、FOMC議事要旨で早期利下げ開始に慎重姿勢である事を改めて示唆する内容となり、株価が下落すると0.6550近辺まで下落。米株式取引終了後に米半導体大手の2023年11月～24年1月決算が予想を大きく上回り、24年2～4月の強気な売上高見通しを受けてアジア株が上昇するとリスクオフの流れから0.6595まで上昇した。但しその後は堅調な米指標を受けて0.65半ばまで下落した。28日、豪1月月次CPIは前月比横ばいで3.4%となり、足元のインフレ上昇懸念が後退した事で0.6537まで下落した。RBNZは利上げを見送り、声明文で今年の利上げリスクが比較的小さいとの予測が示されNZドルが急落。豪ドルも連れ安となり、0.64台後半へ下落した。

■ 今月の見通し

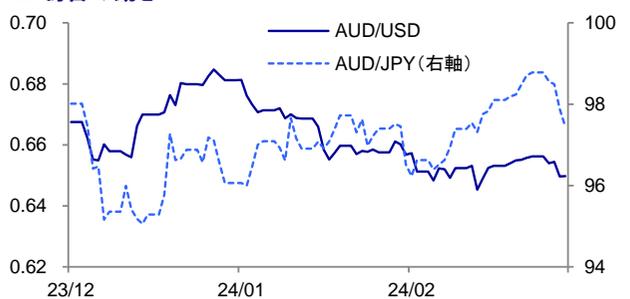
2月の経済指標は豪州では徐々に落ち着きが見られ、一方米国では早期利下げ期待が後退する動きがみられた。2023年4Qの豪消費者物価指数が予想以上に低下していたことや(豪12月の月次CPIインディケーターは3.4%まで低下)、豪1月雇用統計で豪労働環境の逼迫度が緩和したことで、RBAによる早期利下げ期待が高まった。これを受けて豪ドルの上値を圧迫する流れが継続。

RBA2月理事会の議事録要旨では追加利上げも検討した事が明らかとなり、これを受けて金利先物市場では豪RBAによる初回利下げ織り込みが今年8月から9月へと後退したものの、相次ぐ堅調な米国経済指標でドル買いの流れが続いた。米国では米1月消費者物価指数が事前予想を上振れ、新規失業申請件数や米1月雇用統計で依然として米労働市場が堅調であることが示されたことで米国での早期利下げ期待が後退した。尚、FOMC議事要旨では引き続き早期利下げに慎重な姿勢が示唆され、金利先物市場での米FRBによる初回の利下げ織り込みは今年下半期にずれ込んでしまった。現在足元では今年7月に約1回(25bp)の利下げを織り込んでいる。この構図が継続するようなデータが今月も継続するようであれば、豪州ではRBAによる追加利上げの可能性が引き続き低下し、一方で米国ではインフレが確実に鈍化していることを示す一段の証拠を米金融当局者が確認できるまで時間がかかる可能性がある。故に更なる豪ドル下押し圧力がかかるとみられる。

但し、株式市場や住宅市場で利下げ期待が先走り過ぎた場合、資産効果により利下げが難しくなる可能性も燃っている事に留意したい。この場合は豪ドルの下値が支えられる可能性がある。この他の豪ドル支援材料としては中国当局による更なる景気刺激策の実施期待である。2月は中国1月消費者物価指数が大幅に下落した事で中国でのデフレ懸念が燃る中、住宅ローン基準金利となる5年物プライムローン金利が4.2%から3.95%へ利下げされた。これを受けて中国株に買いが入り、豪ドルは中国元と共に一時的に連れ高となったが、息切れ感が漂う。新たな中国の金融政策にも期待したい。

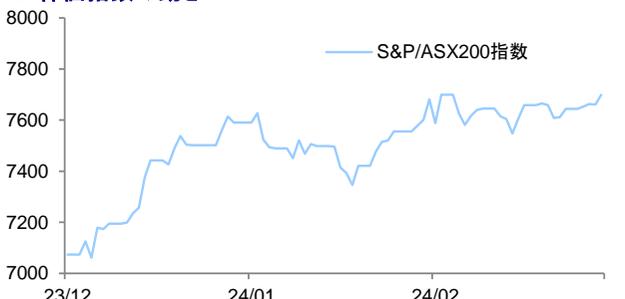
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/6	RBA会合				
2/15	雇用者数変化	1月	25.0k	0.5k	-65.1k
2/15	失業率	1月	4.0%	4.1%	3.9%
2/15	参加率	1月	66.9%	66.8%	66.8%
2/15	正規雇用者数変化	1月	-	11.1k	-106.6k
2/15	非常勤雇用者数変化	1月	-	-10.6k	41.4k
2/20	RBA2月議事要旨				
2/21	賃金指数(前年比)	4Q	4.1%	4.2%	4.0%
2/21	賃金指数(前期比)	4Q	0.9%	0.9%	1.3%
2/28	CPI YoY	1月	3.6%	3.4%	3.4%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3300 ~ 1.3700
CAD/JPY 105.00 ~ 112.00

米州資金部カナダ室 芦崎 瑞穂

■ 先月の為替相場

2月は米国、カナダ共に利下げが既定路線となっているものの、開始時期は不透明で、市場は引き続き主要経済指標の結果を見ながら、利下げのタイミングを探る月となった。米労働市場は変わらず堅調ではあったが、米インフレ率は伸びが加速。FRB関係者からはややハト的な発言もあったが、根強いインフレ圧力に、ほとんどが早期利下げを牽制する姿勢を示した。USD/ドル高圧力が強かったが、利下げ時期が不透明なことなどが上値を重くした。月初、2日米1月雇用統計は非農業部門雇用者数が353k増と市場予想185kを大きく上回り、賃金も約2年ぶりに高い上昇率となった。早期利下げ観測が後退し、米金利上昇に連れ、USD/CADは1.34台半ばへと上昇。9日カナダ1月雇用統計は失業率が5.7%と予想5.9%と前回5.8%から低下。雇用者数は37.3k(予想15k)と前回0.1kから大幅に増加。平均時給は前年同月比で5.3%と前回5.7%から鈍化した。労働市場の強い結果を受け、カナダドル買いが進みUSD/CADは1.3413を付ける場面があった。13日の米1月消費者物価指数(CPI)は前年同月比で3.1%上昇。前回3.4%からは低下したものの、予想2.9%を上回る結果となった。変動の大きい食品とエネルギーを除くコア指数は前年同月比で3.9%上昇。前回からは横ばい、市場予想(3.7%)を上回る強い結果となった。これによりFRBの利下げ時期が遅くなるとの見方が強まり1.3586までUSDドルが買われた。15日米1月小売売上が-0.8%と予想(-0.2%)と前回(0.4%)から大幅に減少。米1月鉱工業生産指も悪化したことでUSD売りが一気に進み、USD/CADは1.34台半ばへと下落。20日のカナダ1月消費者物価指数(CPI)は前年比2.9%と予想(3.3%)と前回(3.4%)を下回った。中銀が重視するコアインフレのトリム平均値と中央値も予想と前回を下回った。インフレが軟化したことが示され、カナダ中銀の早期利下げ観測が高まり、カナダドルが売られUSD/CADは1.3530まで上昇。その後は米指標の結果に一喜一憂しながら狭いレンジでの取引が続いた。月末にかけて米利下げ開始時期が遅れるとの観測や月末のUSDドル買いも相まって、USD/CADは続伸。28日には1.36を上抜ける場面も見られ、USDドル高の流れが続いた。

■ 今月の見通し

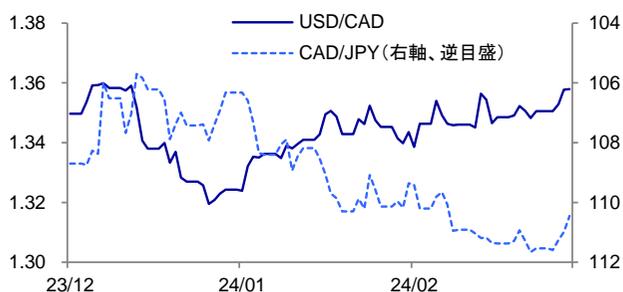
今月6日にカナダ中銀政策金利決定会合が開かれる。金利は据え置かれると市場は予想。カナダのインフレは1月に2.9%に軟化し、中銀の目標範囲内の1-3%のレンジに収まっているが、コアは未だ3%を超過している。先月発表されたカナダ中銀議事要旨では、根強いインフレが続く中、理事会メンバーが早期に利下げを行うことを懸念していたことが示された。市場ではカナダ中銀の最初の利下げは6月になるとの見方が強くなっているが、中銀は生産性の伸びが鈍化する中で、賃金が上昇していることにも警戒している。金融政策が個人消費に影響を与え、経済活動が著しく縮小する可能性があることから、カナダ中銀が予想よりも早く利下げせざるを得ない可能性があるとの見方も一部にある。労働市場の緩和状況は、利下げのタイミングを計る重要なファクターとして注目されている。1月のカナダの雇用統計はヘッドラインの数字が示すほど堅調ではなく、平均時給の伸びの鈍化、就業率の低下、パートタイムの大幅な増加とフルタイムの減少、企業の採用凍結状態などから、内容自体は弱いものだったと認識されている。エコノミストによると第4四半期の小売売上高は圧倒的に自動車に集中しており、四半期の増加の半分以上を占めた。これは供給制約の緩和によって促進されたもので、カナダ中銀の立場からするとインフレのリスクにはならないと見られている。今月22日発表の1月の小売売上高は12月から減少すると市場は見込んでいる。一方、FOMCは19-20日に開催される。金利据え置きが市場のコンセンサスだが、声明文に変化があるか、利下げ時期のタイミングのヒントがあるかに大きな注目が集まる。1月のインフレ率の伸びが加速したことを受け、FRB関係者からは早期利下げを牽制する発言が繰り返され、ジェファーソン副議長の講演では今年後半から利下げを行うのが適切との言及があり6月の利下げ観測が低下し、7月に後ずれするとの予測も出始めている。今月も経済指標を眺めながら利下げ時期を探る月になると思われる、インフレ率や雇用統計に対する市場の荒い動きには特に注意したい。FRBはデータを少なくともあと数か月は観察すると思われ、利下げ時期をめぐっては不透明感が強い。カナダ側では、利下げ前倒し観測も出始めており、USDドル高が継続し、USD/CADは1.33-1.37で推移すると予想する。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地で人気の旅行先』
カナダ人に人気の旅行先と言えば、メキシコ、キューバなどが上がります。メキシコのリゾート地カンクンへはトロントから飛行機で4時間。メキシコへの旅行者数は米国が圧倒的に多いですが、次に多いのがカナダです。近年は高騰し続けるカナダの住宅価格や、物価高に見切りをつけて、メキシコに移住する人たちも増えているようです。キューバも同様にトロントから飛行機で3時間で行ける近場のリゾート地です。とは言え、カナダ人に一番人気がある旅行先は、隣国である米国です。米国に行く旅行者数はメキシコへの旅行者の10倍近くになります。ニューヨーク、ラスベガス、カリフォルニアはもちろんですが、特にフロリダはオンタリオ州とケベック州に住むカナダ人に人気があります。例年カナダ人口の10%の400万人もの人がフロリダを訪れています。また、「スノーボード」と呼ばれる多くの退職者がフロリダにセカンドハウスを所有し、冬になるとフロリダへ向かい、暖かい気候を楽しみます。クルーズ船の多くはフロリダ州のマイアミ、フォートローダーデール、ポートカナベラルから出発し、カリブ海周辺の島々を巡ります。フロリダ州オーランドにあるディズニーワールド、ユニバーサルスタジオ、ブッシュガーデン、ケネディ宇宙センターなどのお楽しみも盛りだくさんです。フロリダへはトロントから飛行機で約4時間で行けますが、意外にも多くの人が車で行きます。オンタリオ州やケベック州からは約2日かかります。フロリダへの州間高速道路75号線のルートは非常に人気があり、そのルート専用のガイドブックも発行され毎年更新されています。ミンガン、オハイオ、ケンタッキー、テネシー、ジョージアの5州を通過する旅となり、米国の広大な景色を堪能できます。

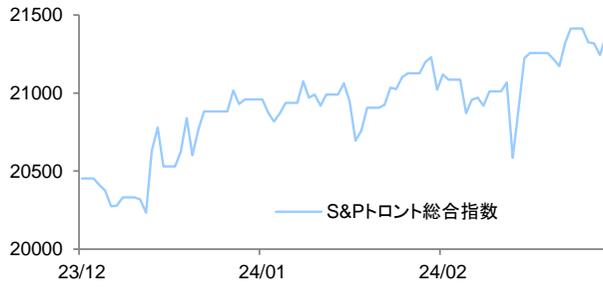
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	1月	46.5	48.3	45.4
2/6	住宅建設許可(前月比)	12月	2.0%	-14.0%	-5.0%
2/9	雇用ネット変化率	1月	15.0k	37.3k	0.1k
2/9	失業率	1月	5.9%	5.7%	5.8%
2/15	製造業売上高(前月比)	12月	-0.6%	-0.7%	1.5%
2/15	住宅着工件数	1月	235.0k	223.6k	249.0k
2/20	CPI(前年比)	1月	3.3%	2.9%	3.4%
2/20	CPI季調前(前月比)	1月	0.4%	0.0%	-0.3%
2/22	小売売上高(前月比)	12月	0.8%	0.9%	0.0%
2/22	小売売上高(除自動車/前月比)	12月	0.7%	0.6%	-0.4%

韓国ウォン相場

予想レンジ:	USD/KRW	1290	～	1350	(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート
	KRW/JPY	10.87	～	11.49	
	JPY/KRW	8.70	～	9.20	

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

2月のドル/ウォン相場は方向感に乏しい推移が継続。月初のドル/ウォンは1,335.0ウォンでオープン。株式市場が堅調な推移を見せる中で、海外投資家からの資金流入や月初の輸出企業による決済需要から一時1,320ウォン付近の安値をつけた。

2日夜間の米雇用統計が市場予想比良好な結果だったことで、翌週5日は1,337.0ウォンまで上昇してオープン。その後は輸出企業のドル売りによりじりじりと上値を切り下げる展開に。6日には中国当局が株価の下落を受けた支援策や市場の監視強化策を発表。これを受けて人民元高が進行したことで、ウォンも連れて買われ、再び1,320ウォン前半まで下落した。7日、8日は旧正月を控え動意に乏しく1,330ウォン手前の水準で小動きだった。

旧正月明け13日の日中は小動きとなるも、同海外時間に米1月CPIが発表され市場予想比上振れると米金利が上昇。翌14日に1,340.4ウォンの月高値をつけた。高値圏では、輸出企業によるドル売り需要も旺盛で、その後は水準を切り下げ、1,330ウォン前半までの推移が週末まで継続した。

中国春節明け19日、20日は中国株式、人民元動向を横目に見ながら、ドル/ウォンは1,330ウォン前半から後半レベルで推移。22日には米ハイテク企業の好決算を受けて韓国株式も半導体銘柄を中心に買われウォン買い優勢に。一時1330ウォンを下回り推移した。

翌26日、27日は方向感に乏しい推移。韓国株式の低評価を解消する為の施策として韓国政府による「企業価値向上プログラム」が発表されるも、市場の反応は冷ややか。株式は下落し、ウォン売り圧力が強まるも、ドル/ウォンの上値は限定的。28日は輸入企業のウォン買いフローにより一時1,337ウォン付近まで上昇。その後、1,333.6ウォンでクローズした。

■ 今月の見通し

3月のドル/ウォンは上値重い推移を予想。2月のドル/ウォンは1,330ウォン前後でのレンジ推移に。米CPI等指標の上振れにより米金利が上昇し、ドル/ウォンは底堅い推移となるも、今年中盤以降の利下げを意識してか、ドル買いも盛り上がり上値は限定的な推移となった。

2月22日に韓国中銀は9会合連続政策金利の据え置きを決定。メンバーの一人が利下げを容認する姿勢をみせるも、総裁は上半期の利下げを否定しており、早期利下げに対しては慎重な姿勢を示した。現時点で為替相場への影響は限定的で、早急にBOKの利下げを市場が織り込みウォンが下落する可能性は低いだろう。

韓国の1月輸出額は約547億ドルと前年同月比+18.0%を記録。昨年10月から4か月連続で増加した。特に半導体の輸出が前年比+56.2%と大幅に増加。AI関連メモリーの輸出増加や、需給環境の改善による価格上昇が寄与した。月間の貿易黒字も昨年6月以来8か月連続で黒字を記録しており、貿易の回復が鮮明になっている。これら実需のフローや米金利の上昇一服が意識され、3月のドル/ウォンは徐々にウォン高推移するものと想定する。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

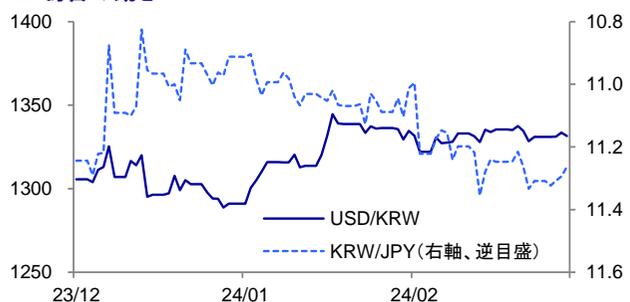
『当地で人気の旅行先』

当地で人気の海外旅行先としては、日本や東南アジアが挙げられます。日本は言わずもがなですが、ほぼすべての日本の空港向けに定期便があるのではないかと勘違いしてしまうほど、航空路線が充実しています。私は四国に実家がありますが、もちろん直行便が週に複数回出ており、しかもほぼ満席で運用されていることに驚きました。

東南アジアも地理的に近いこともあり、人気です。日本からは直行便が出ていない地域にも韓国からは直行便が出ているケースがあります。私も先日、ベトナムのフーコック島へ旅行しましたが、こちらの路線も満席で、多くの家族連れでにぎわっていました。当地ならではの航空路線の便利さを活かして、今年も旅行計画を立てたいと思います。

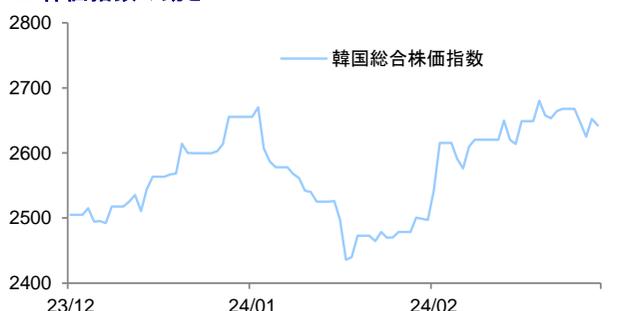
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	貿易収支	1月	1000M	300M	4500M
2/1	輸出(前年比)	1月	17.6%	18.0%	5.1%
2/1	輸入(前年比)	1月	-8.1%	-7.8%	-10.8%
2/2	CPI(前年比)	1月	0.4%	0.4%	0.0%
2/16	失業率	1月	3.2%	3.0%	3.3%
2/20	消費者信頼感	2月	-	101.9	101.6
2/21	PPI(前年比)	1月	-	1.3%	1.2%
2/21	BOK政策金利	-	3.5%	3.5%	3.5%
2/27	小売売上高(前年比)	1月	-	8.2%	7.5%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.75 ~ 31.75
TWD/JPY 4.55 ~ 4.80

東アジア資金部台北室 久本 和樹

■ 先月の為替相場

2月のドル/台湾ドルは上昇した。

月初の2月1日は31.280でオープン。1日に発表された米第4四半期単位労働コストが軟調な結果となったことを受けて、ドル売りが優勢となり一時31.194まで下落。その後、2日に米1月雇用統計が発表されると、非農業部門雇用者数、失業率、平均時給すべての項目が市場予想対比強い結果となったことを受けてグローバルにドル買いが優勢となり、ドル/台湾ドルは春節休暇の前に31.30台半ばまで上昇した。

8日から14日は春節休暇に伴い台湾ドル市場は休場となっていたが、13日に発表された米1月CPIが市場予想を上回る強い結果となったことを受けて、米国の早期利下げ観測が後退する展開に。春節休暇が明け月央に差し掛かると、ドル/台湾ドルは米金利の上昇を受けてドル買いが優勢な展開となった。16日に発表された米1月PPIも市場予想を上回る堅調な結果となったことで一段とドル買いが優勢な展開となり、31.40台まで上昇した。

月後半に入ると、21日に発表されたFOMC議事録において早期利下げに慎重な姿勢が示されていたことを受け、市場で織り込まれていた早期利下げ期待が剥落する形で米金利が一段と上昇。その後もFRB高官より、早期利下げに慎重なスタンスが示される中、ドル買いが一段と加速する展開となり、一時31.620まで上昇した。月末にかけては米金利が高止まりする中、ドル買い圧力が残存し31.50台後半で底堅い推移となった。

■ 今月の見通し

3月のドル/台湾ドルは下落を見込む。

2月は米国雇用指標、インフレ指標が市場予想を上回る強い結果となっていたことや、FOMC議事録とFRB高官の発言より早期利下げに慎重なスタンスが示されたことを受けて米金利が上昇する中、ドル買いが優勢な展開となり、ドル/台湾ドルは上昇する展開となった。

3月のドル/台湾ドルについては、下落する展開を見込む。足許米国においては年内に3回ほどの利下げ迄織り込みが剥落しており、FRBの見立てに整合的な水準となってきたことから、米金利の一段の上昇は想定されずらく、ドル買い圧力も早晩一服するであろう。一方で、米国株の上昇につれ台湾加権指数も史上最高値を更新し、19,000ポイント台に定着しつつある中、外国人投資家による投資資金流入が期待され、台湾ドル買い圧力は強まりやすく、ドル/台湾ドルは下落に転じやすいであろう。但し、米経済が再加速し、利下げ開始時期がさらに後ずれする場合には、ドル買い圧力が強まる展開にも留意したい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

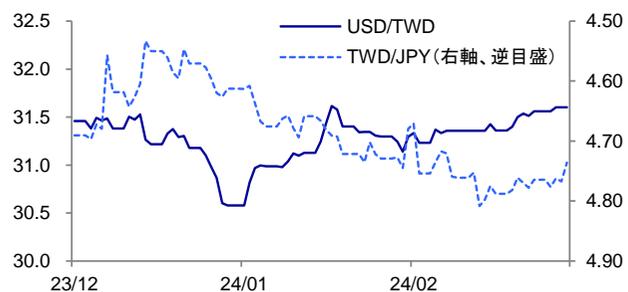
『当地で人気の旅行先』

当地で人気の旅行先は、1位東京、2位大阪、3位バンコク、4位香港、5位京都奈良となっていました。ランキングではTOP5の内三つを日本が占める形となっており、それをご覧頂ければ、台湾の方がいかに日本に旅行するのが好きかがお判り頂けると思います。また、人気観光スポットでも1位渋谷スカイ、2位東京スカイツリー、3位ワーナーブラザーズスタジオツアー東京と、日本がTOP3を独占していました。

また日本に旅行するにあたっては日本の季節感が楽しめる場所であるということも非常に重要なようです。特に台湾は年中暖かい気候になっているので、例えば、冬に雪が降るような場所でのスキーや、秋の紅葉などが非常に人気となっています。北海道などは、海鮮料理も非常に人気となっており今後旅行先ランキングでも上位に入ってくるのではないのでしょうか。

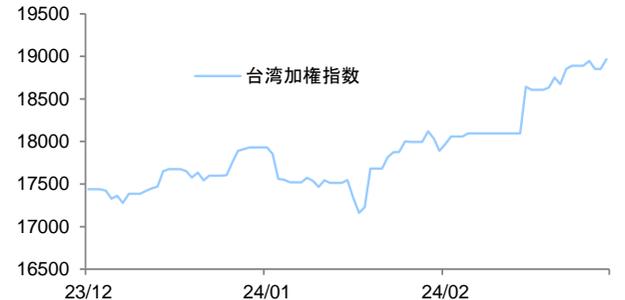
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/5	外貨準備高	1月	-	569.54B	570.60B
2/6	CPI (前年比)	1月	2.20%	1.79%	2.71%
2/7	輸出 (前年比)	1月	19.50%	18.10%	11.80%
2/7	輸入 (前年比)	1月	-3.15%	19.00%	-6.50%
2/7	貿易収支	1月	8.90B	2.49B	11.10B
2/27	輸出受注 (前年比)	1月	-3.60%	1.90%	-16.00%

(資料) ブルームバーク

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8000 ~ 7.8350
HKD/JPY 18.70 ~ 19.60

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【1月の香港ドル直物相場】

1月の香港ドル直物相場は、昨年11月末から続く香港ドル安トレンドが継続し、7.825まで水準を切り下げた。米国連邦準備制度理事会(FRB)による早期利下げの期待が堅調な雇用やインフレによって剥落しており、3月利下げの織り込みは消失し、2024年内の利下げ期待も3回未満まで減少した。香港ドルのT/Nのフォワードポイントが-2ポイントを下回ったことで米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードの妙味も復活し、香港ドル直物相場の下落圧力につながった。一方で、香港株式への資金流入は徐々に拡大し、年初来で400億香港ドルを超えた。ハンセン株式指数は旧正月休暇明け以降のグローバルなリスク選好相場を追随して上昇したものの、IPOが引き続き低調だったことから、年初来の下落幅を取り戻すほどの香港ドル上昇圧力にはならなかった。加えて、香港の不動産市場に関しては縮小傾向が進み、中原城市領先指数(CCL指数)は7年ぶりの低水準まで下落した。取引量も沈んだままで、不良資産の残高は2023年末に20年ぶりの高水準に急増した。冴えない株式市場及び不動産市場は香港への投資資金流入を妨げており、香港ドル市場への弱気見通しに繋がっている。

【1月の香港ドル金利市場】

香港ドルHIBORの上昇は頭打ちとなり、1か月物は4.5%、3か月物は4.7%付近で推移している。HIBORカーブの順イールドで安定的に推移しているのは、米金利の利下げ期待剥落による金利高継続見直しに加え、2月の季節要因による香港ドル金利低下が影響しているといえる。香港ドルが米ドルベッグ制の取引レンジ内の中心を推移する中、香港金融管理局(HKMA)のアグリゲートバランスは450億香港ドル近辺の水準に留まった。長期ゾーンの香港ドルスワップ金利はFRBの利下げ期待剥落に伴って上昇したが、米ドル金利と比較すると、香港ドルでは固定金利受け取りの取引需要が比較的多かった事で、上昇圧力は対比で限定的だった。しかし、じりじりと低下する短期金利とは逆に、長期金利は上昇した事によって、逆イールドを狙うキャリートレード(3年物スワップ金利買い vs 3か月物HIBOR受け)の取引量は減少した。

■ 今月の見通し

【1月の香港ドル直物相場】

我々は、香港ドルの直物相場は今年を通じて7.8レベルで推移するとみている。FRBの利下げサイクルが我々の基本的なシナリオ通りに後ずれすれば、キャリートレードの増加が米ドル買い/香港ドル売りの動きを下支えし、米ドルと香港ドルの金利差が広がることで、USD/HKDのフォワードポイントもデイスカウントを深めるだろう。香港域内に目を向けても、弱気な株式市場及び不動産市況や財政赤字、中国経済への懸念が外国人投資家による資金流入を妨げるとみられる。高い金利や厳しい香港の成長見通しで香港ドルの借入需要も限定的だろう。

【1月の香港ドル金利市場】

FRBによる利下げ期待が後退する中、香港ドル金利は現在の水準で安定する可能性が高いと考えている。堅調な米経済指標が発表される中、近く開催されるFOMC会合で今後のFRBによる政策見通しに関する詳細が公表されるだろう。また、3月末の季節性需要は香港ドル金利の上昇圧力としてはたらくものの、低調な資金需要から米金利と比較すると低い低位での推移が見込まれる。香港ドルの直物相場が米ドルベッグ制の取引レンジにおける上下限まで動く事も考えにくいいため、HKMAのアグリゲートバランスは450億香港ドル付近に据え置かれるだろう。

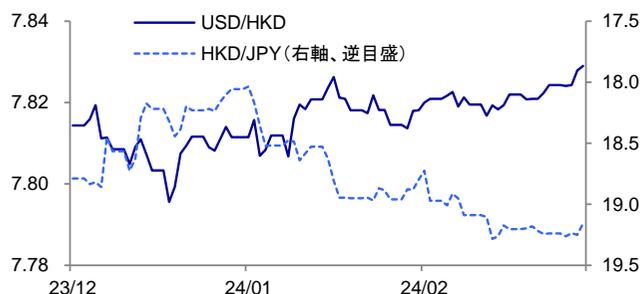
■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地で人気の旅行先』

往來が再開されて以降、日本は香港の人々の人気旅行先のトップに浮上しています。距離の近さに加え、手ごろな価格が多い航空便が日本旅行への人気につながっています。また、円安の影響や欧米諸国対比低いインフレ率は、香港の旅行者にとって比較的リーズナブルに旅を楽しめる事に繋がっています。日本の文化的な魅力とその名高い料理は、常に香港市民の人気者のでした。コロナ禍で旅行が制限されていた際も多くの香港市民は域内で高級寿司を食べ、「おまかせ」もブームになっていました。日本への旅行が解禁されたことで、より手ごろな価格で且つ本場の寿司を食す事ができるようになった事も日本旅行の人気に拍車をかけているといえそうです。更に、日本の「四季」の魅力が通年で何度も訪れる理由になっています。春の桜、秋の紅葉、冬の雪景色は非常に人気で香港市民の多くはこの風景を見に行く事を楽しみにしています。その結果、日本は香港の人々にとって第二の故郷と言われ、日本を訪れた際に香港人を見かける事や街中で広東語での会話を聞く事は一般的になっています。日本と香港の強い文化的なつながりや、漢字という共通の文字を使用している事も香港出身者の人気に確実に寄与しているでしょう。

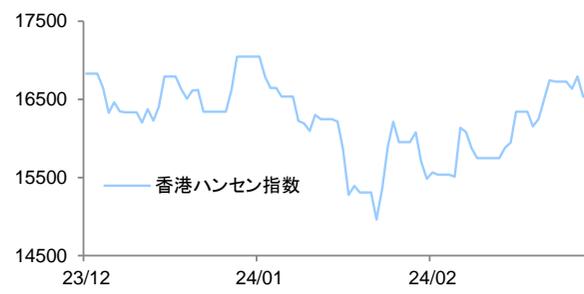
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/31	GDP前年比	4Q A	4.7%	4.3%	4.1%
2/1	小売売上高(価額前年比)	12月	12.8%	7.8%	15.9%
2/5	S&P Global Hong Kong PMI	1月	-	49.9	51.3
2/7	外貨準備高	1月	-	\$423.2b	\$425.5b
2/20	失業率(季調済)	1月	3.0%	2.9%	2.9%
2/22	CPIコンポジット(前年比)	1月	2.1%	1.7%	2.4%
2/27	輸出(前年比)	1月	22.4%	33.6%	11.0%
2/27	輸入(前年比)	1月	22.8%	21.7%	11.6%
2/27	貿易収支(HKD)	1月	-28.8b	3.6b	-59.6b

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 7.1000 ~ 7.2500
 CNY/JPY 19.30 ~ 21.40
 100JPY/CNY 4.6700 ~ 5.1800

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 竹本 寛

■ 先月の為替相場

1月のドル人民元(オンショアUSDCNY)は横ばい推移となった。

1日、オンショアUSDCNYは7.17台後半でオープン。オープン前の時間帯に行われたFOMC後のパウエル議長会見において、3月利下げ可能性が低いことが示されるとドル買い優勢の動き。6日、中国当局による株価下支えを強化する旨の政策発表等を受けて、7日にかけては元高が進行する場面も見られたが、値幅は限定的となった。春節を前に流動性は次第に低下し、7.19台を中心とした推移のまま9日を終えた。

春節明けの19日は大きく水準を変えることなく、7.19台前半でオープン。春節期間の消費動向に回復が見られたとの報道や、春節入り前(9日)に公表された金融統計で家計部門の資金調達動向に上振れが確認されたこともあって、中国株は堅調な動き。市場のセンチメントが改善する中で21日には一時的に7.17台まで下落する場面も見られたが、中国当局の追加的な金融緩和措置に対する思惑や、FRBボードメンバーの早期利下げ期待をけん制する発言等が続いたこともあり、7.19台へ再び戻す動きとなった。

最終週に入ると、翌月に全人代を控える中で目新しい材料もなく、7.19台で動意に乏しい展開となった。27日19時時点(CST)では7.19台後半で推移している。2月を通じたオンショアUSDCNYの値幅は本欄執筆時点で251pipsとなっており、2015年6月以来の水準となる非常に狭いレンジでの推移となった。

■ 今月の見通し

ドル人民元(オンショアUSDCNY)は上値は限定的ながら底堅さを維持すると予想する。

2月は預金準備率や中資系銀行の預金金利引き下げの他、LPR5年物についても引き下げが実施された。事実上の政策金利ともされるLPR1年物に連動するMLF1年物については、引き下げ予想が燦の中で金利水準を維持する状態が継続しているものの、ロールオーバー時に増額供給するなど、今後も追加的な緩和期待は残存しそうだ。中国国債利回りは低下地合いが継続する中、米FRBのボードメンバーからは堅調な米経済指標を背景に早期利下げ期待に対してけん制をする発言も一部では聞かれており、米中金利差を背景としたUSDCNYに対する上昇圧力はしばらく維持されることも想定される。

春節期間中の人出や消費が好調だったという報道を受けて、中国株は底打ち感も見られている。ストックコネクトを通じた香港経由の人民元建て株式に対する投資フロー(北向き)は、ようやくプラス圏に浮上(年初来累積で流入超)し、またそれに先行して中国債や金融債の保有残高においても外国人投資家は買い越しに転じている様子が伺える。しかしながら、不動産市場に目を移せば2級都市以下で特に低迷が続いており、景気の先行きについては楽観視はできない状況は変わっていない。ファンダメンタルズの側面からは元安優勢ではあるものの、当局はPBOC基準値を元高方向で設定させることでUSDCNYの上昇を抑制しており、足元の当局姿勢からは今後も同様の方策で元安圧力を抑えていく可能性が相応に高く、上値追いは限定的と見られる。

3月5日には全人代が開幕する。2024年の成長率目標の設定水準および達成に向けた政策に注目が集まる。経済成長期待から人民元にポジティブな影響を与える可能性もある一方、短期的には通貨供給増に対する思惑から元安圧力が強まる可能性もあり、留意しておきたい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地で人気の旅行先』

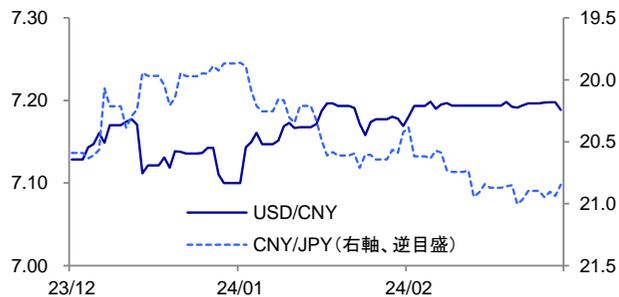
中国の有名旅行サイトが集計した今回の春節期間の中国人人気旅行先トップはハルビンでした。ハルビンは中国最北端にある黒竜江省の省都で冬には氷祭りが有名です。2023年の中国の流行語に「特殊部隊式旅行」というものがあります。これは時間や費用をかけずに多くの観光スポットを回る弾丸旅行のようなことを意味しますが、有名な観光地が固まり、且つ冬には「映え」スポットも多い、ハルビンのような場所が若者を中心に人気となった要因のようです。

中国は国土も広く、長い歴史もあることから世界遺産や雄大な自然など、回り切れないほど観光地がある国です。私自身も訪れていない有名観光地がまだまだたくさんあるのですが、5年近く住んでいるとニッチな場所に行きたくてくるものです。

かくいう私は、中国とミャンマーの国境に位置する雲南省の少数民族の自治州に位置する芒市/瑞麗市に行ってきました。「地球の歩き方」にはもちろん載っておらず、周囲の中国人に聞いても知っている人はなかなかいません。派手な観光地ではないですが、ミャンマーと中国の文化が織り交ざった独特な雰囲気味わえて、これはこれで旅行に来たという感じがします。英語は通じず、中国語の方言も強めの地域になりますので、日本から行くには結構ハードル高めなエリアかもしれませんが、ボーダーライン好きの方はぜひ訪れてみてください。

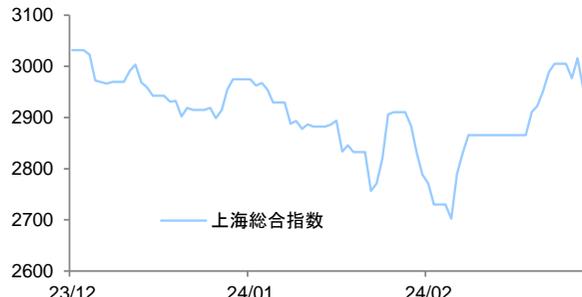
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	財新製造業PMI	1月	50.8	50.8	50.8
2/5	財新非製造業PMI	1月	53.0	52.7	52.9
2/8	PPI(前年比)	1月	-2.6%	-2.5%	-2.7%
2/8	CPI(前年比)	1月	-0.5%	-0.8%	-0.3%
2/18	MLF金利(1年物)	-	2.50%	2.50%	2.50%
2/20	LPR(1年物)	-	3.40%	3.45%	3.45%
2/20	LPR(5年物)	-	4.10%	3.95%	4.20%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3300 ~ 1.3700
SGD/JPY 108.00 ~ 113.00

アジア・オセアニア資金部 松本 彩花

■ 先月の為替相場

先月のUSD/SGD相場は上昇。

1日、USD/SGDは1.33台後半でオープン。月初発表の米経済指標の弱い結果を受け米金利が低下すると、ドル売り動きが加速し一時1.33台半ばまで下落。2日、1月米雇用統計の結果が堅調だったことを受けドル全面高の展開に。USD/SGDもドル買いの流れから節目である1.34を上抜けた。

5日、アジア時間朝方のパウエルFRB議長による3月利下げに対する消極的な発言を受けUSD/SGDは先週からの上昇の流れを継続。海外時間に入り、米1月ISM非製造業景気指数が予想対比上振れとなったことを受け、ドル買いに拍車がかかりUSD/SGDは1.34台半ば付近まで上昇した。その後は米金利動向に連れられ、1.34台前半にて一進一退の展開。9日は旧正月を控え、アジア通貨は全般的に薄商いとなり、USD/SGDも狭い値動きに終始。

旧正月明け13日、海外時間にて注目の米1月CPIが発表され予想対比上振れとなり、ドルが急上昇。USD/SGDは一時1.35台前半まで上昇。その後は15日発表の米1月小売売上高や16日発表の米2月シガン大学消費者マインド指数が予想を下振れたため、USD/SGDも1.34台半ばまで緩やかに水準を切り下げる展開に。2月中旬については米1月CPI等の重要な経済指標を一通り消化すると、特段新規材料もなく1.34台半ば付近での小動きとなった。

22日、欧州時間序盤にドルが弱含み一時的に1.34を割り込む場面も見られたが、同日発表の米新規失業保険申請件数等の経済指標の結果が良好であったことや、ジェファーソンFRB副議長による政策金利の過度な引き下げに対する牽制発言を受け、すぐに1.34台を回復。その後月末にかけては、相場の方向感が定まりづらく新規材料待ちの状況が継続。1.34台半ば付近での小幅な動きとなった。

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGD相場は堅調推移を予想。但し、今月はFOMCをはじめとした中央銀行イベントが続くため、サプライズによる潮流の変化には警戒が必要。

先月のUSD/SGDはドル高の流れから上昇する展開となったが、主な要因は米経済が依然底堅いことや、FRB高官による利下げに対する牽制発言。米1月CPIは前年比+3.1%と物価目標からはまだ乖離していることや米国の雇用関連指標の結果も足元良好なことから、3月FOMCでの利下げの可能性は低いとの見方が市場のコンセンサス。既定路線となればドル高基調は継続するものと考えられる。また、3月FOMCについてはドットチャート公表のタイミングであり、ドットチャートにおける2024年度利下げ織り込み回数や、会合後のパウエル議長記者会見にて米経済や利下げに対してどのような見解が示されるかに注視が必要。

一方で、シンガポールにおいては1月CPIが前年比+2.9%と予想を下回った。前回結果である前年比+3.7%と比較してもインフレ率は着実に低下しており、金融引き締め効果が確認できている状況。今後より一層の金融引き締めは想定されづらい。また、MASは前回会合にて、シンガポールの経済先行きに関しては「一段の世界的なショックがない限り、国内経済は一段と強まり、さらなる成長が見込まれる」との強気な見解を示しているが、金融引き締めの影響で今年はグローバルに景気減速リスクを抱えている状況。シンガポールは外需依存度も高いため、この点には警戒が必要と考えられる。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地で人気の旅行先』
国土が狭いシンガポール、国内でも遊べる場所はありますが、週末にちょっと国外へ、という方も多く、「ゴルフをしにインドネシアのバタム島へ行った」とか、「買い物・レゴランドへマレーシアのジョホールバルへ」等、色々聞きます。こういったものはもはや旅行、というような扱いはなく、東京から横浜みなとみらいへ行く程度の感覚でしょうか。

いわゆる「旅行」となると、コロナ後の一番人気はやはり日本。チームのメンバーでも多くの人が日本に行っています。行き先で多いのはやはり、東京・京都。2度目以降の訪日となると北海道や九州等が人気な印象です。

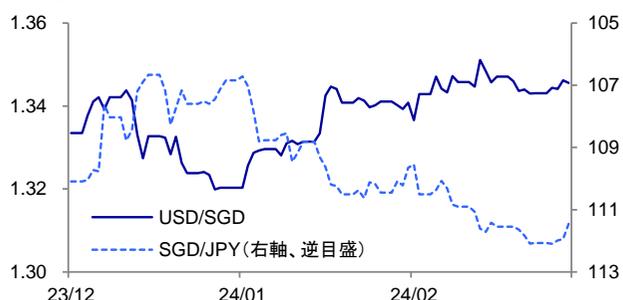
日本以外ですと近場のプーケット、セブ島、バリ島等、少し足を延ばすのであればモルディブやオーストラリア等も人気。日本からオーストラリアに行くのは遠いから、という理由もあり日本人派遣員からはオーストラリアのペースが人気な印象。パースへは5年程前から成田から直行便も出ているようですがフライト時間は10時間程と長時間。シンガポールからだと5時間で行けてしまうことを考えると駐在中に旅行する人が多いというのも納得。ちなみに、パースにはピカチュウのモデルとなったと言われているクオッカという動物がいる他、ピーチもキレイとのこと。

個人的にはインドネシアのコモド島でコモドドラゴンを見たいと思っていますが、家族の同意は得られず「動物園でみれば」と言われています。

(アジア・オセアニア資金部 綱島)

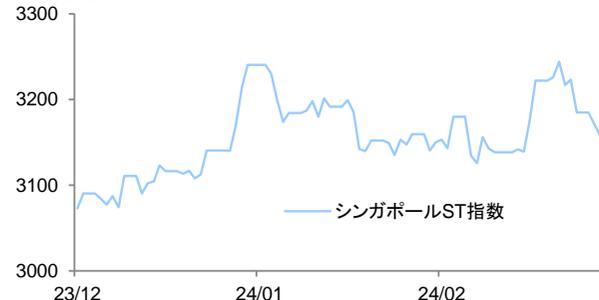
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/5	小売売上高(前年比)	12月	-3.1%	-0.4%	2.5%
2/16	非石油輸出(前年比)	1月	4.3%	16.8%	-1.5%
2/23	CPI(前年比)	1月	3.8%	2.9%	3.7%
2/26	鉱工業生産(前年比)	1月	3.7%	1.1%	-2.5%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 35.00 ~ 36.30
THB/JPY 4.10 ~ 4.25

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 末廣 絢太

■ 先月の為替相場

2月のドルバーツは続伸。月初、35バーツ台半ば付近で取引を開始すると、2日に公表された米1月雇用統計が堅調な結果であったことから、ドルがほぼ全面高の様相を呈する中、ドルバーツも上昇。翌週5日にはパウエルFRB議長からタカ派なコメントが確認されたこと、タイ1月CPIがヘッドラインで▲1.11%(前年同月比)となり市場予想対比マイナス幅が拡大したこと、米1月ISM非製造業景況指数が良好な結果であったこと等の要因も重なり上値を伸ばし、一時35バーツ台後半の水準を付けた。上昇一服後は35バーツ台半ばまで戻すも、7日のタイ中銀(BOT)による金融政策委員会(MPC)において、市場予想通り政策金利据え置きが決定されるも、メンバー7人のうち2人が金利引き下げに投票していたことから、利下げの思感が台頭する中、バーツ安が進行。36バーツ手前まで上昇した。

中旬、13日に発表された米1月CPIの市場予想を上回る結果を受けて米利下げ期待が剥落する中、ドルバーツは36バーツ台前半まで上昇。ただ、同水準では上値の重さも意識され、しばらく方向感に欠ける推移が続いた。19日にはタイ第4四半期GDPが発表され、前期比で▲0.6%、前年比で+1.7%と弱い結果に。これを受けてセーター・タイ首相がBOTに対し緊急会合の開催による利下げを要請する等、タイ政府とBOTの対立構造が再び意識される展開となるも、ドルバーツの値動きは大きいものとはならず、36バーツちょうどを挟んだ推移が継続した。

下旬、特段目立った材料が見当たらない中ではるものの、ややドルバーツの勢いは失速。じりじりと35バーツ台後半まで値を落とし、本欄執筆時点である2月27日現在では同水準での推移が続いている。

■ 今月の見通し

3月のドルバーツは、上昇の勢いが鈍化する展開を想定。1月末に行われた今年最初のFOMCでは、次の一手は利下げではあるものの、インフレ目標実現への自信が深まるまでは利下げを急がない姿勢が示された。会合以降もFed高官から「利下げ検討は時期尚早」である旨の発言が相次いで確認されたことから、市場は既に米利下げ開始時期の後ズレを相応に織り込んでおり、今後、米早期利下げ観測の後退を材料にドルバーツが上げ幅を大きく拡大させる展開は想定し難いものと考えている。

タイ国内に目を向けると、弱い国内経済指標やBOTによるMPCにおいて利下げを主張するメンバーが確認される等、バーツ安の進行を想起させる要因が確認されている状況。ただ、2月に発表され、市場予想を大きく下回る結果となり注目された同国2023年第4四半期GDPについて、内訳を見てみると、民間消費支出は前年同期比で+7.4%と力強さを維持している。これは前回(2月7日開催)のBOTによるMPCでの声明文にて示された「タイの内需は拡大を続けて」おり、タイ経済減速の要因は「外部、及び構造的な要因」との主張に沿った結果であったと捉えることもできよう。指標発表後にはBOT高官より「民間消費は想定以上に強い」旨のコメントが出されている。加えて、タイ経済の懸案事項の一つである中国人観光客の戻りについても昨年後半から増加傾向にあり、2024年1月は50万人超となっていることがタイ観光・スポーツ省のデータから確認できる。春節休暇を経た2月分についても堅調な推移が想定されることと、動向の確認が必要な状況。かかる中、タイ中銀が早期にスタンスを変更する公算は大きくないと考えており、次回のMPCが4月開催予定であることを勘案すれば、THB安の動きも大きくは進行しないことをメインナリオとして考えておきたい。ただ、タイ政府がタイ中銀に利下げを要請する動きや、タクシン元首相の扱いを巡る一部国民の不満の高まり等、同国の政治を巡る不透明感についてはドルバーツ相場の上方向へのリスクとして捉えておきたい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

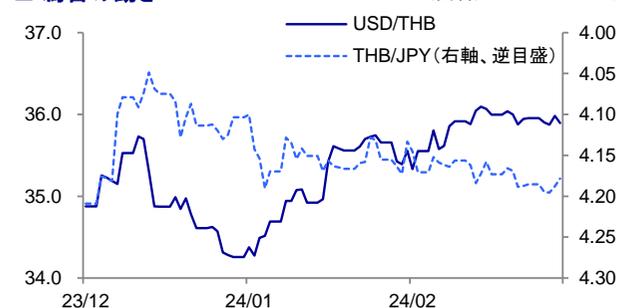
『当地で人気の旅行先』
現在、当地で人気の旅行先と言えば、日本を挙げる事ができるだろう。日本政府観光局のデータによれば、2023年にタイから日本を訪れた観光客は995,500人となっている一方で、タイ観光・スポーツ省のデータによれば、日本からタイを訪れた観光客は805,768人となっており、昨年は「訪日タイ人>訪日日本人」と従来の構図からの逆転現象が発生し、話題になった。

また、訪日タイ人の特徴として、リピーターが多いということが挙げられるようだ。実際、当室においても多くのスタッフから複数回日本に行ったことがあるという話を聞くことができた。中には主要な観光スポットは行き尽くしたのか、我々日本人が「そんなところ行ったの」とビックリするような日本旅行体験記を語ってくれたスタッフもいた。

そうなってくると、もはや手に負えない。我々駐在員が彼らの期待する水準の答えを出せないののである。当地スタッフから、日本のある地方のおすすめスポットを聞かれた際、「ごめん。その地域には行ったこないからよく分からないな」と答えた際に向けられた「期待はずれだよ」感満載の視線を私は忘れることはないだろう。

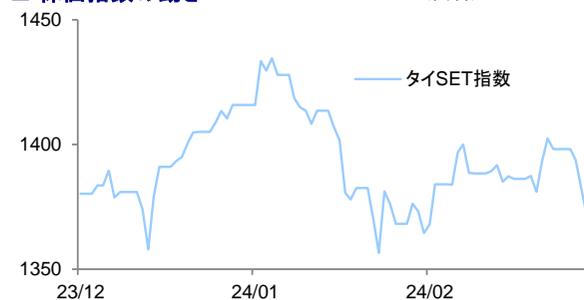
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/5	CPI YoY	1月	-0.90%	-1.11%	-0.83%
2/5	CPIコアYoY	1月	0.60%	0.52%	0.58%
2/7	タイ中銀政策金利	-	2.50%	2.50%	2.50%
2/13	消費者信頼感指数	1月	-	56.9	56.0
2/19	GDPYoY	4Q	2.6%	1.7%	1.4%
2/22	自動車販売台数	1月	-	54,814	68,326
2/23	輸出(通関ベース)YoY	1月	7.90%	10.00%	4.65%
2/23	輸入(通関ベース)YoY	1月	-4.50%	2.60%	-3.05%
2/23	貿易収支(通関ベース)	1月	-\$1,425M	-\$2,800M	\$973M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.73	~	4.83
	MYR/JPY	31.05	~	32.05
	JPY/MYR	3.12	~	3.22

マレーシアみずほ銀行 内田 暉

■ 先月の為替相場

先月のリング相場は米国の堅調な雇用指標や物価指標の鈍化が緩やかに進み中でドルの利下げ見通しが後退するなど、外部環境に振られる展開。USD/MYRは昨年11月の高値をブレイクし、98年アジア通貨危機以来の26年ぶりリング安を記録した。

上旬は2日NY時間に発表された1月米雇用統計が市場予想を大幅に上回る内容となり米国債利回りは12-20bpの大幅上昇。ドットチャートが示す当局者による年内利下げ見通し(75bpの利下げ)と市場参加者による見通し(122bpの利下げ)のギャップを埋めに行くようなFRB当局者の発言が繰り返され米金利は上値を伸ばした。USD/MYRは旧正月連休を前に市場参加者は積極的な取引を控えたことでオンショア市場は非常に閑散となった。

中旬は13日の米CPIが市場予想を上回る結果となり米国債利回りが10-20bp急上昇。通貨ドルが急騰する中、新興国通貨全般に売り優勢となりリングも連れ安。USD/MYRは4.78台半ばまで水準を切り上げた。また、16日発表の第4四半期GDP確報値は、前年同期比+3.4%から+3.0%に大きく下方修正されたことで23年通期ベースGDPは3.7%に着地。政府見通し+4.0%から▲0.3pt下回る厳しい内容だった。

下旬にかけては、USD/MYRが心理的な節目となる4.8を目前にリングの買いフローが細る中、21日には98年アジア通貨危機以来のリング安水準まで売り込まれた。また、20日に発表された1月貿易統計はヘッドラインこそ23年2月以来の前年比プラスに改善した一方、主力のE&Eが引き続き▲6.5%と減速が続いており、中国向け輸出も回復の兆しが確認できない状況。USD/MYRが23年11月の高値を突破すると、馬中銀総裁は過度のリング安を牽制する緊急声明を発表するに至った。声明発表後USD/MYRはやや高値達成感からの売りも入った。結局、月初4.72台で取引開始したUSD/MYRは、リング買い材料を見つけないことなく歴史的安値に向かってやや一方的な値動きとなった。

■ 今月の見通し

年明け以降米指標の発表を消化する度に売り込まれるリングにとって逆風の市場環境が続いた。一方、この2か月マレーシア国内外の指標にも少しずつ変化の兆しが確認できたことは、今後のリング相場を占う上では注目すべきポイントと言える。

まずは国内指標を見ていく。先月16日に発表された第四四半期GDP並びに23年通期ベースGDPの結果は失望売りを誘う内容。政府見通しをも下回る結果であり、発表後の国内経済に対する見方は悲観的な見方が広がったことは間違いない。一方、1月貿易統計は、主力のE&Eが引き続き減速し、貿易相手国首位の中国向け輸出も軟調だったことから手放しで喜べる内容ではなかったが、ヘッドラインベースでは23年2月以来のプラス成長を記録。世界的にも半導体の市況改善が見られる状況下、E&Eを主力とした製造業が国内経済に少なからず影響を与えるマレーシア経済にとっては、今後を期待させる内容と言える。

国外に目を向けると、年明け以降のドル買いリング売りの過程で昨年12月FOMCで公表されたドットチャートでのFOMCメンバーの年内利下げ見通しと市場参加者の年内利下げ見通しは昨年12月時点でそれぞれ3回と6回利下げと約3回分のギャップがあった。これがFOMCメンバーの見通しに市場参加者見通しが近づく形で足許ほぼギャップは解消されている状況となっている。つまり、ここから更にドル金利が上昇するとすれば、市場がFOMCメンバーを上回るタカ派姿勢を示すことを意味する。今後それが実現する可能性はゼロではないものの、足許の物価指標を確認する限りでは、その可能性は高くないだろう。今月21日にFOMC開催が予定されており、今回はドットチャートが公表される会合であることから、市場が方向感を持って動き出すとすれば同会合以降になると見ている。

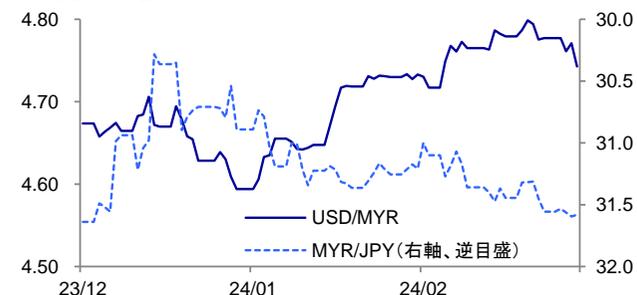
上記の国内外の注目点を踏まえると、今月は1、2月の様なやや一方のリング安展開とはならず、やや方向感にかけると不安定な相場展開となる。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地で人気の旅行先』
当地で人気の旅行先と言えば、ランカウイ島やコタキナバルが誰も真っ先に思いつく観光地だと思いますが、世代や民族などによってバラつきがあるのも確か。そこで今回はマレーシア統計局が発表する国内旅行関連データを調べてみることにしました。Domestic Tourism Survey 2022によりますと、マレーシア人の国内人気旅行先トップ5は1位セランゴール、2位クアラルンプール連邦直轄領。旅行者数で見ればやはり首都圏が人気旅行先として選ばれています。別データで旅行目的のトップ5が1位親戚友人と会う、2位ショッピング、3位レジャー&リラックスと続くことを踏まえると納得の結果です。そこで旅行者数3位以下に注目しますと、3位サラワク、4位ペラ、5位バハンと続く結果。冒頭紹介したランカウイ島、コタキナバルは各々ケダ州、サバ州に属していますので、マレー人の国内旅行者数という観点で見れば、更に人気の場所がある様です。尚、3位 サラワク州は、サバ州と共にボルネオ島にあり数多くの国立公園がある自然豊かな地域ですが、個人的にはサラワク州シブのご当地名物コロミーと呼ばれる汁なし麺が好物です。これを食べるとなぜか学生時代に食べた油そばを思い出します。4位ペラと言えばマレーシア第3の都市で美食の街で有名なイポーが代表的な都市。チキンライスやイポーもやしが有名ですが、少なくとも中華料理なら何食べてもお手頃価格で美味です。最後に5位バハン州は、キャメロンハイランド、ゲンティンハイランドなど高山避暑地で有名です。常夏の国に暮らすマレーっ子にとって、暑さを凌いで美味しい食事が取れる場所が人気なのですね。そうすると首都圏にあるショッピングモールが実は一番なのかもしれません。

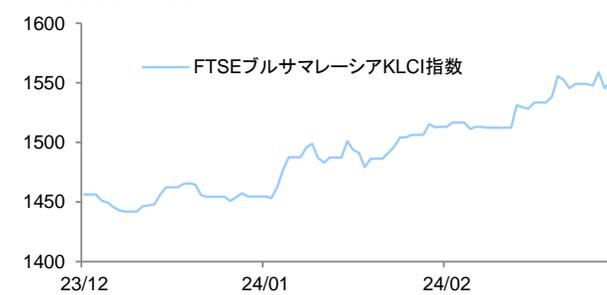
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/7	Industrial Production YoY	Dec	0.6%	-0.1%	0.6%
2/8	Foreign Reserves	Jan 31		\$114.8b	\$115.1b
2/16	GDP Annual YoY	2023 F	3.8%	3.7%	3.8%
2/16	GDP YoY	4Q F	3.4%	3.0%	3.4%
2/16	BoP Current Account Balance MYR	4Q	4.9b	0.3b	9.1b
2/20	Exports YoY	Jan	3.0%	8.7%	-10.0%
2/20	Imports YoY	Jan	8.0%	18.8%	2.9%
2/22	Foreign Reserves	Feb 15		\$115.4b	\$114.8b
2/23	CPI YoY	Jan	1.6%	1.5%	1.5%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR	15400	~	15800
IDR/JPY	0.9434	~	0.9804
JPY/IDR	102.00	~	106.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 網島 正侑記

■ 先月の為替相場

2月のルピアは小幅上昇。月初1日、ドル/ルピアは15700台後半で取引を開始。発表された1月インドネシア消費者物価指数(CPI)は前年同月比+2.57%となり、市場予想を小幅に上回る結果となったが市場の反応は限定的。海外時間、米国株が好調な企業決算の結果を受け上昇したことからリスクセンチメントが改善すると、翌2日のアジア時間にはルピアは対ドルで上昇し15600台半ばまでルピア高が進展。2日海外時間に発表された米雇用統計は事前予想対比良好な結果となり市場はドル買いで反応し、週明け5日のアジア時間にはドル/ルピアは15700台前半までドル高が進展した。6日には中国株が上昇する中で人民元が買われる展開となると、アジア通貨は連れ高となり翌7日にかけてルピアは15600台前半まで反発した。インドネシア連休明けとなる12日、ドル/ルピアは15600台前半で取引を開始し14日に大統領選を控える中、同水準で方向感なく推移。14日、注目のインドネシア大統領選が行われ、同日に発表された初期集計ではプラボヴォ氏が過半数を獲得したとされ、プラボヴォ氏陣営による勝利宣言がなされた。事前の世論調査でもプラボヴォ氏が優勢とみられていたこともあり市場の混乱も限定的。公式発表が待たれる中ではあるものの大統領選が決選投票へもつれ込まないと期待される中、ルピアは小幅に上昇して15日の取引を開始。15500台半ばで取引を開始したが、13日海外時間の米1月CPIの結果や、日中に発表されたインドネシア1月の貿易収支の軟調な結果等を材料に15600近辺までドルが買われルピアは反落。その後は15600台前半を中心とした狭いレンジでの値動きが継続。21日にはインドネシア中銀会合が開催されたが、事前の予想通り政策金利の据え置きが発表され、市場の反応は限定的。15600近辺での取引が継続したが、月末にかけては実需のルピア売り圧力に押され15600台後半まで値を戻してクローズした。

■ 今月の見通し

3月のルピアは堅調な値動きを予想。米金利市場では、今年の米政策金利について1月時点では年内6回程度の利下げ(▲1.25%)を織り込んでいたが、足許では3回程度まで織込みが後退。利下げ期待が後退する中、2月上旬にかけ米金利上昇・ドル買い戻しの動きが支配的となっていた。背景には米景気の減速懸念が後退したことがあり、足許では株価も堅調に推移している。2月は株高や、中国の利下げを好感したリスクセンチメントの改善により新興国通貨が上昇する局面も見られており、ルピアも対ドルで小幅に上昇に転じた。3月も引き続き株高の流れが継続するものと考えられ、新興国通貨には追い風となろう。また、注目されたインドネシア大統領選も14日の選挙でプラボヴォ氏の当選が濃厚となっており、6月の決選投票へもつれ込む事態は回避される公算が高い。決選投票へもつれ込み政治的に不安定になることを回避できたことは、インドネシア経済にとっても好材料と考えられる。また、2月に行われたインドネシア中銀会合後のペリー・BI総裁会見では当面の間政策金利を据え置くとの見方が示された。引続きコモ価格の高騰が懸念されているものの引続きインフレ率は中銀の定めるインフレ誘導目標のレンジ内に収まっていることに加え、3月のコモ収穫後には価格も安定すると見込まれる為、現時点での政策変更の必要性は低いものと考えられる。引続き現状の政策金利を維持した後、米利下げに遅れる形で利下げへ踏み切るものと予想する。

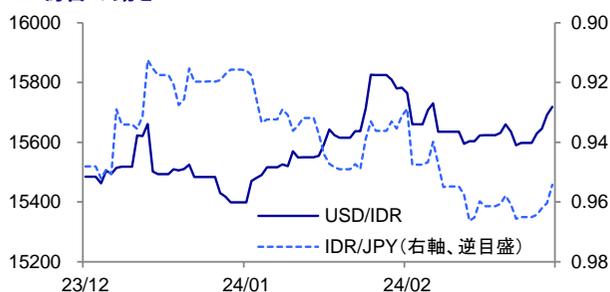
■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地で人気の旅行先』
「バリ島」
神々の島としても知られ、島に足を踏み入れるとすぐに、魅惑的な南国の雰囲気が出迎えてくれます。島には、自然のままのビーチ、輝かしい山々、神聖な寺院、活気に満ちたナイトクラブ、その他多くの隠れた宝石が待っており、無限の興奮を満喫できます。最も人気のあるスポットは、ウブドモンキーフォレスト、ウルワツ寺院、クタビーチです。写真を撮るのにもっと美しい場所をお探したら、タナロットが最適です。文字通り「海の土地」を意味するタナロットは、打ち寄せる波と映画のような空の色を背景に、広大な海に面した岩の上にそびえるバリの寺院(プラ)のイメージを表現しています。「西パプア州ラジャアンバット」
海洋および水上観光に興味のある人は、この目的地についてよく知っているはず。ここは西パプアにある手付かずの楽園で、母なる自然とフレンドリーな地元の人々があらゆる素晴らしい驚異であなただけを歓迎します。文字通り「四人の王」を意味するラジャアンバットは、ワイゲオ、バタンタ、サラワティ、ミソールの4つの主要な島を取り囲む1,500以上の小さな島、ケイ、浅瀬で構成される諸島です。水中愛好家にとって、ラジャアンバットは世界最高の海洋体験を提供します。陸海980万ヘクタールのラジャアンバット諸島には、540種類のサンゴ、1,000種類以上のサンゴ礁の魚、700種類の軟体動物が生息しています。このため、ここは世界中のサンゴ礁と水中生物相にとって最も多様な水生生息地となっています。水面を探索するだけでなく、深く潜って別世界の水中の世界に浸ることもできます。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

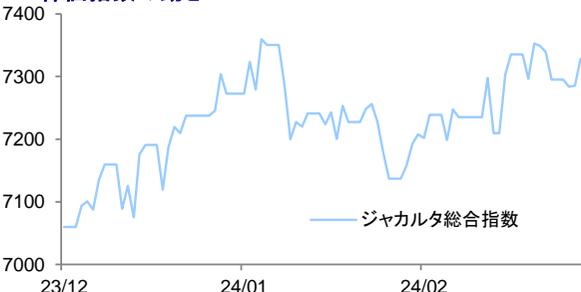
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	CPI(前年同月比)	1月	2.53%	2.57%	2.61%
2/15	貿易収支(USD M)	1月	2,823	2,015	3,307
2/15	輸出(前年比)	1月	-3.20%	-8.06%	-5.76%
2/15	輸入(前年比)	1月	1.79%	0.36%	-3.81%
2/22	BI金利	-	6.00%	6.00%	6.00%
2/22	経常収支(USD M)	4Q	-200.00	-1,290.00	-860.00

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 55.00 ~ 57.00
JPY/PHP 0.360 ~ 0.385

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

1月FOMCは総じてタカ派な内容となるも、根強い早期米利下げ期待のほか、米地銀の健全性に対する懸念からドルが下落し、2日にペソは約3週間ぶりの高値水準まで上昇。米1月雇用統計が想定外に強い結果となり、米金利急上昇となったことからドルが押し上げられ、5日にペソは反落する局面もみられたが、その後、1月の比消費者物価指数(CPI)は前年比+2.8%と市場予想の+3.1%を下回り、前月の+3.9%から大幅鈍化となるも、フィリピン中央銀行(BSP)は十分に引締めめ金融政策を維持する必要があるとのタカ派姿勢を示したことや、米地銀に対する懸念からドル全面安となったことからペソは反発、上旬は堅調推移となった。

米1月CPIが市場予想を上振れ、早期利下げ観測が後退し、ドルが急上昇となったことから、14日にペソは約1週間ぶりの安値まで下落。しかしながら、その後はドル上昇が一巡したほか、昨年12月の比海外在留労働者からの送金が前年比+3.8%と市場予想の+2.4%を上回る伸びとなったことが支援材料となり、ペソは反発を見せるなど、強弱材料混じる中、中旬は1米ドル=56ペソを挟んでもみ合い推移となった。15日にBSPは大方の予想通り、政策金利据え置きを決定し、当面は引締めめスタンスを維持することが適切としたが、ペソへの影響は限定的となった。

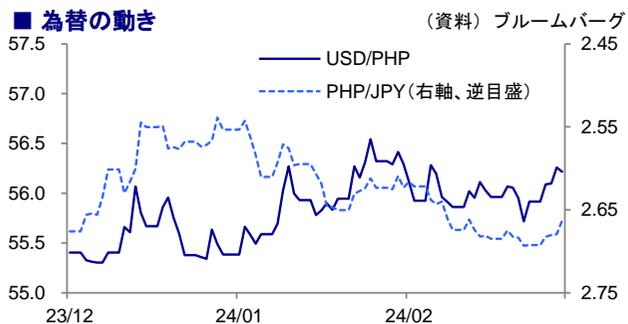
下旬に入り、日欧米の株式が過去最高値を更新するなど、世界的な株値上昇を受けたセンチメント改善から、アジア通貨が上昇し、ペソは約1か月半ぶりの高値となる1米ドル=55.700ペソまで上昇する局面が見られたものの、米労働市場の堅調さが改めて示されたほか、大規模な社債発行や米債券の入札の影響から、米金利が上昇したことから、ドルが押し上げられ、ペソは反落。その後は特段の材料に欠ける中、中旬からの1米ドル=56ペソを挟んでもみ合い推移が継続となった(27日時点)。

■ 今月の見通し

直近発表された米経済指標から米労働市場の堅調さやインフレ圧力の根強さが示唆され、過度な早期米利下げ観測が後退し、足許の市場織り込みは年内3回程度と米金融当局者が想定する政策金利予測と概ね一致するところまで修正されており、現行水準からの米金利上昇余地は限定的となろう。一方で、米経済環境は底堅さを見せ、ソフトランディングの可能性が見込まれ、物価・賃金上昇圧力に対する懸念も燃えることから、米金融当局は政策緩和を急ぐ必要性は高くない。従って、米金融当局は当面の間は利上げも利下げもできず、現状維持を続ける可能性が高いため、ドルに明確な方向感が出づらな展開を見込む。

BSPはエルニーニョ現象の影響による物価上昇リスクを警戒しているほか、米国に先行して利下げに政策転嫁する可能性は低く、今後も引締めめ姿勢を維持する可能性が高く、早期利下げの可能性は低い。政策金利差の観点では米比共に当面の据え置きが見込まれる中、PHP相場に方向感を決定づける材料となりにくい。ドル主導の相場の中、米インフレ・労働指標の結果を受けた米政策金利バスに対する見方に振られるボラタイルな展開が続くとの見方は変わらずであるが、1米ドル=56ペソを挟んでのレンジ相場となる公算が高い。昨年の比金融当局の防衛ラインとなった1米ドル=57ペソ付近からその後米利下げ織り込みが急速に進んだ局面につけた1米ドル=55ペソ付近のドル/ペソ相場のレンジの上下限となろう。

■ 為替の動き



■ 株値指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
----	----	----	----

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 82.60 ~ 83.50
INR/JPY 1.74 ~ 1.85

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

【2月の米ドル/インドルピーは節目83水準から小幅にじり高】
82台後半水準にて当月取引を開始。月初については、USD売りの流れに連れられつつ、フロー主導にてルピー高の展開。一方、82.85水準近傍では、逆サイドのフローとインド準備銀行(RBI)からの下支えの為替介入(USD買いINR売り)により、水準感を取り戻す動きに転じる。2月の金融政策委員会(MPC)での据え置き措置およびややハト派な結果を受けて、じり安の動きに節目の83水準を回復後は、同水準での横這い推移が継続した。月末にかけては、大口のフロー主導で節目の83水準を割り込む水準までルピー高が進行したものの、月初の82.85水準にて再び底堅い動きを見せ、結局、月を通しては小幅なルピー高水準にてクローズ(23日時点)。

SENSEXは、一時利益確定売りの様相から、71,000水準を割り込む局面も散見されたものの、総じて上昇基調の流れは継続。月末にかけて、年初来高値に迫る勢いで上値を伸ばす展開を見せた。

インド経済指標では、1月製造業/サービス業PMIは良好な結果に。注目された2月MPCは、6会合連続となる政策金利据え置き(6.50%)を実施。一方、今回投票は5対1と、2022年以降の利上げ局面から、初めて利下げ票が入るサプライズな恰好となった。また、政策スタンス(インフレ退治に向けた利上げ路線継続)は不変のままを維持したものの、躊躇なく利上げといった方向感にややハト派色が加わった様相。1月消費者物価指数(CPI、前年比)は+5.10%と、前回の+5.69%から低下し、インフレターゲット上限である+6%の範囲内に収まっている状況。1月貿易収支は赤字幅は縮小したものの赤字常態化は継続、通貨として売られやすい立ち位置は不変のまま。

■ 今月の見通し

【3月の米ドル/インドルピーは節目83水準近傍で安定推移か】
3月においては、節目83水準を目標とした安定推移の展開を見込む。2月は、フロー主導にて当該水準からルピー高の展開となったものの、下値水準では、実需勢の動きに加えて、RBIからの為替介入もしっかり散見されていることから、過度な値動きは抑制されている。年始からのUSD安・USD高の流れに対抗し、RBIからのアンダーコントロールに伴って、値幅は極めて限定的な状況下、目線感としての安定推移路線は崩さず、83~84ルピーのレンジ感は維持しつつ、年央~年後半にかけての米国利下げ局面におけるUSD売り基調下での値動きに注視していきたい。

2月MPCは、政策金利は据え置きとなったものの、全会一致での据え置きから、反対票(利下げ票)が初めて入る恰好。直近のCPIはインフレターゲットの上限(+6%)の範囲内に収まっている状況が継続しており、RBIのインフレ見通しの軟化や「デイスインフレへのラストマイル」とのダス・RBI総裁のコメントに鑑み、インフレ動向を睨みつつ、現状維持からの利下げ局面入りか年後半にかけて視野に入ってくる可能性も。

インド株式投資に加えて、長期投資という観点でも、インド債券への投資資金流入の買い越しが顕著になり始めている状況で、上値抑えのファクターとなり得ると共に、米経済の失速・利下げ局面入りにて本年後半にかけてルピー高の流れが顕在化する方向感で見ておくと、RBIからの下支えの為替介入や根強い実需勢からのアウトフロー(インドルピー売り)により、方向感ルピー安に回帰していく見方を、維持していきたい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

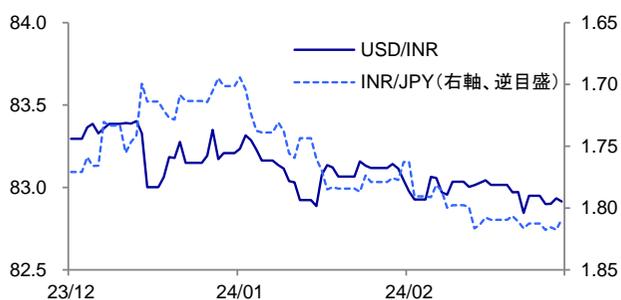
『当地で人気の旅行先』
魅力的な場所がたくさんあり、行く場所によって全く違う色がみられる当地では、人気な場所を絞るのが難しいところですが、北インドのラダックやカシミール、西インドのムンバイの近くに位置するゴア、南インドのケララ、北東のアッサム、ダーズリンなどは日本人にも人気な旅行先なのではないでしょうか。また、デリーから近いジャイプールなども人気の旅行先とし挙げられるような気がします。

当地は日本に比べて海外にも行きやすく、モルディブやドバイ、スリランカ、ネパールなど、当地から近く、飛行機も安く取れる場所は、現地の人も含めて、人気な海外旅行先として挙げられるのではないのでしょうか。

私の個人的な話にはなりますが、最近とても魅力を感じている北東インドに4月に初めて旅行をする予定です。北東インド全ての州をいくつか制覇してみたいものですが、まずはメガラヤからスタートをし、北東インドの魅力存分に味わってこようと思います。(インド営業部ニューデリー 七戸)

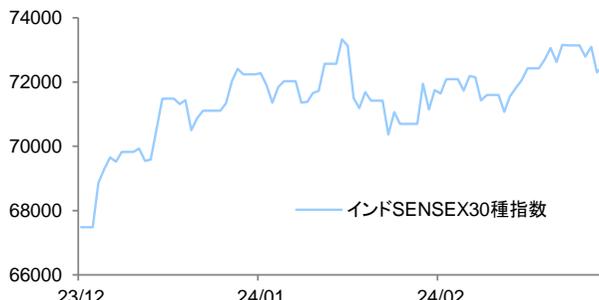
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

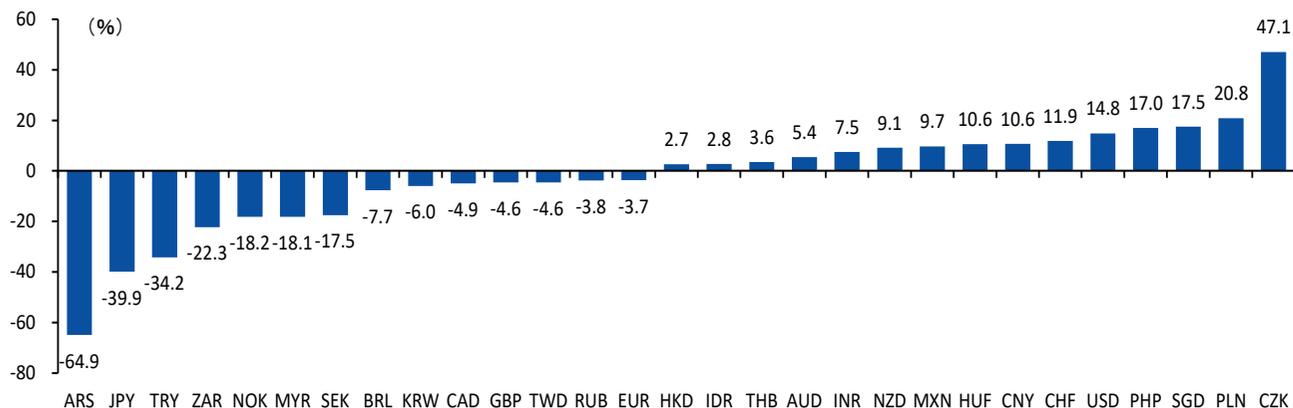
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	製造業PMI	1月	-	56.5	56.9
2/5	サービス業PMI	1月	-	61.8	61.2
2/8	政策金利	2月	6.50%	6.50%	6.50%
2/12	鉱工業生産	12月	2.50%	3.80%	2.40%
2/12	CPI	1月	5.00%	5.10%	5.69%
2/15	貿易収支(百万ドル)	1月	-20,000	-17,491	-19,803

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2023年末	2024年2月末	騰落率	株式市場	2023年末	2024年2月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	37689.54	38996.39	3.5%	-
日本	USD/JPY	141.04	149.98	6.3%	日経平均株価	33464.17	39166.19	17.0%	10.1%
ユーロ圏	EUR/USD	1.1039	1.0805	-2.1%	ドイツDAX指数	16751.64	17678.19	5.5%	5.5%
英国	GBP/USD	1.2731	1.2625	-0.8%	ロンドンFTSE100指数	7733.24	7630.02	-1.3%	-0.5%
豪州	AUD/USD	0.6812	0.6497	-4.6%	S&P/ASX200指数	7590.818	7698.699	1.4%	6.3%
カナダ	USD/CAD	1.3243	1.3579	2.5%	S&Pトロント総合指数	20958.44	21363.61	1.9%	-0.6%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	7.1	7.1886	1.2%	上海総合	2974.935	3015.171	1.4%	0.1%
香港	USD/HKD	7.8115	7.829	0.2%	香港ハンセン	17047.39	16511.44	-3.1%	-3.4%
インド	USD/INR	83.2088	82.9138	-0.4%	インドSENSEX30種	72240.26	72500.3	0.4%	0.7%
インドネシア	USD/IDR	15399	15719	2.1%	ジャカルタ総合	7272.797	7316.111	0.6%	-1.5%
韓国	USD/KRW	1291.07	1331.46	3.1%	韓国総合株価	2655.28	2642.36	-0.5%	-3.5%
マレーシア	USD/MYR	4.594	4.7428	3.2%	ブルサマレーシアKLCI	1454.66	1551.44	6.7%	3.3%
フィリピン	USD/PHP	55.385	56.215	1.5%	フィリピン総合	6450.04	6944.71	7.7%	6.1%
シンガポール	USD/SGD	1.3203	1.3456	1.9%	シンガポールST	3240.27	3141.85	-3.0%	-4.9%
台湾	USD/TWD	30.579	31.602	3.3%	台湾加権	17930.81	18966.77	5.8%	2.4%
タイ	USD/THB	34.256	35.896	4.8%	タイSET	1415.85	1370.67	-3.2%	-7.6%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2024年1月時点)



■ 実質GDP成長率

	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2023Q4	2022	2023
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	-0.6	2.7	2.6	2.2	2.1	4.9	3.2	1.9	2.5
日本*	4.6	-0.8	1.7	4.4	4.0	-3.3	-0.4	1.0	1.9
ユーロ圏	4.1	2.4	1.8	1.3	0.6	0.0	0.1	3.4	
英国	3.9	2.1	0.6	0.4	0.3	0.2	-0.2	4.3	0.1
豪州	3.5	5.8	2.3	2.4	2.0	2.1		3.8	
カナダ*	3.8	1.8	-0.9	2.5	1.4	-1.1	1.0	3.8	
エマーGINGアジア									
中国	0.4	3.9	2.9	4.5	6.3	4.9	5.2	3.0	5.2
香港	-1.2	-4.6	-4.3	2.9	1.5	4.1	4.3	-3.7	3.2
インド	12.8	5.5	4.3	6.2	8.2	8.1	8.4	9.1	7.0
インドネシア	5.5	5.7	5.0	5.0	5.2	4.9	5.0	5.3	5.1
韓国	2.9	3.2	1.4	0.9	0.9	1.4	2.2	2.6	1.4
マレーシア	8.8	14.1	7.1	5.6	2.9	3.3	3.0	8.7	3.7
フィリピン	7.5	7.7	7.1	6.4	4.3	6.0	5.6	7.6	5.6
シンガポール	4.6	4.2	2.4	0.5	0.5	1.0	2.2	3.9	1.1
台湾	3.5	4.0	-0.7	-3.5	1.4	2.2	4.9	2.6	1.3
タイ	2.4	4.4	1.3	2.6	1.8	1.4	1.7	2.5	1.9

(注)インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	23/06	23/07	23/08	23/09	23/10	23/11	23/12	24/01	2022	2023
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.6	3.5	3.8	3.8	3.8	3.7	3.7	3.7	3.6	3.6
日本	2.5	2.7	2.7	2.6	2.5	2.5	2.4		2.6	2.6
ユーロ圏	6.4	6.5	6.5	6.5	6.5	6.4	6.4		6.7	6.5
英国	4.2	4.3	4.2	4.1	4.0	3.9	3.8		3.7	4.0
豪州	3.5	3.8	3.7	3.6	3.8	3.9	3.9	4.1	3.7	3.7
カナダ	5.4	5.5	5.5	5.6	5.7	5.8	5.8	5.7	5.3	5.4
エマーGINGアジア										
中国										
香港	2.9	2.8	2.8	2.8	2.9	2.9	2.9	2.9	4.3	3.0
インドネシア			5.3						5.9	5.4
韓国	2.6	2.8	2.5	2.6	2.5	2.8	3.2	3.0	2.9	2.7
マレーシア	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3		3.8	3.4
フィリピン	4.5	4.8	4.4	4.5	4.2	3.6	3.1		5.4	4.4
シンガポール	2.6	2.4	2.2	2.1	2.1	2.0	1.8		2.1	1.9
台湾	3.4	3.4	3.4	3.5	3.4	3.4	3.4	3.4	3.7	3.5
タイ	1.1			1.0						

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	23/05	23/06	23/07	23/08	23/09	23/10	23/11	23/12	24/01	2022	2023
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	4.0	3.0	3.2	3.7	3.7	3.2	3.1	3.4	3.1	8.0	4.1
日本	3.2	3.3	3.3	3.2	3.0	3.3	2.8	2.6	2.2	2.5	3.3
ユーロ圏	6.1	5.5	5.3	5.2	4.3	2.9	2.4	2.9	2.8	8.4	5.5
英国	8.7	7.9	6.8	6.7	6.7	4.6	3.9	4.0	4.0	9.1	7.3
豪州		6.0			5.4			4.1		6.6	5.6
カナダ	4.4	3.4	3.3	4.0	3.8	3.1	3.1	3.4	2.9	6.8	3.9
エマーGINGアジア											
中国	0.2	0.0	-0.3	0.1	0.0	-0.2	-0.5	-0.3	-0.8	2.0	0.2
香港	2.0	1.9	1.8	1.8	2.0	2.7	2.6	2.4	1.7	1.9	2.1
インド	4.3	4.9	7.4	6.8	5.0	4.9	5.6	5.7	5.1	6.7	5.7
インドネシア	4.0	3.5	3.1	3.3	2.3	2.6	2.9	2.6	2.6	4.2	3.7
韓国	3.4	2.7	2.4	3.4	3.7	3.8	3.3	3.2	2.8	5.1	3.6
マレーシア	2.8	2.4	2.0	2.0	1.9	1.8	1.5	1.5	1.5	3.4	2.5
フィリピン	6.1	5.4	4.7	5.3	6.1	4.9	4.1	3.9	2.8	5.8	6.0
シンガポール	5.1	4.5	4.1	4.0	4.1	4.7	3.6	3.7	2.9	6.1	4.8
台湾	2.0	1.8	1.9	2.5	2.9	3.0	2.9	2.7	1.8	3.0	2.5
タイ	0.5	0.2	0.4	0.9	0.3	-0.3	-0.4	-0.8	-1.1	6.1	1.3

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2023Q4	2022	2023
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.9	-3.8	-3.7	-3.4	-3.2	-3.1		-3.8	
日本	3.0	2.3	1.9	1.5	2.0	2.9	3.5	1.9	
ユーロ圏	1.0	-0.2	-0.6	-0.4	0.3	1.2		-0.6	
英国	-3.4	-3.2	-3.1	-1.9	-1.8	-2.0			
豪州	1.8	0.8	1.1	1.3	1.2	1.2		1.1	
カナダ	0.3	-0.1	-0.4	-0.7	-1.1	-0.9		-0.4	
エマーGINGアジア									
中国	2.1	2.5	2.4	2.2	2.2	1.8	1.5	2.2	
香港	10.6	11.4	10.2	9.1	9.4	8.8		10.2	
インド	-1.9	-2.6	-2.4	-2.0	-1.7	-1.0		-2.4	
インドネシア	0.9	0.9	1.1	1.2	0.7	0.2	-0.1	1.0	0.2
韓国	4.1	2.8	1.6	0.4	0.2	1.1		1.5	
マレーシア	2.7	2.5	3.1	3.0	3.3	2.8	1.3	3.1	
フィリピン	-4.6	-5.9	-4.6	-4.5	-3.4	-2.5		-4.4	
シンガポール	18.9	18.8	18.0	18.2	18.2	18.5	19.8	18.0	19.8
台湾	14.9	14.3	13.4	12.1	11.9	12.7	13.9	13.4	13.9
タイ	-3.1	-3.7	-3.2	-2.1	-0.9	1.2			

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	5.25-5.50	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/7/26	+25bp	2024/1/31	現状維持
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2024/1/23	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	4.00	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2023/9/14	+25bp	2024/1/25	現状維持
英国	バンク・レート	5.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2023/8/3	+25bp	2024/2/1	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	4.35	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/11/7	+25bp	2024/2/6	現状維持
カナダ	翌日物金利	5.00	引き締め: 2022/3/2	0.25	2023/7/12	+25bp	2024/1/24	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.45	緩和: 2012/6/8	6.31	2023/8/21	-10bp	2024/2/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2024/2/8	現状維持
インドネシア	BI金利	6.00	引き締め: 2022/8/23	3.50	2023/10/19	+25bp	2024/2/21	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2024/2/22	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	引き締め: 2022/5/11	1.75	2023/5/3	+25bp	2024/1/24	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.50	引き締め: 2022/5/19	2.00	2023/10/26	+25bp	2024/2/15	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	2.50	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/9/27	+25bp	2024/2/7	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp	2023/5/23	-50bp

(注) インドネシア中銀は2023年12月21日に政策金利を7日物リバースレポレートからBI金利に変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行